

平成 26 年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 7

－国庫補助事業に伴う発掘調査－

平成27年(2015年)3月



茨木市教育委員会

平成 26 年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 7

－国庫補助事業に伴う発掘調査－

平成27年(2015年)3月



茨木市教育委員会

序 文

本書は、平成 26 年に茨木市教育委員会が主体となって実施した、個人住宅建築工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査の概要報告書です。

茨木市は大阪府の北部に位置し、北は老の坂山地を介して京都府亀岡市と接します。市域北部の山々は広大な森林を控え、市域南部へ流れる茨木川、安威川、勝尾寺川流域には、古来、人々の生活が営まれました。これら祖先の生活の痕跡こそが埋蔵文化財であり、それは現代に生きる私たちにとつても、かけがえのない財産です。

しかし、大阪と京都を結ぶ地にある茨木市は、近年の大規模な開発によって宅地化が進み、土地利用の形態が変化したことによって、多くの埋蔵文化財を現状のまま残すことが困難となっていました。そのため、埋蔵文化財を記録・保存することによって、先人達から永く受け継がれてきた郷土の宝を後世に伝えていく必要があります。

本書で報告する牟礼遺跡、茨木遺跡、倍賀遺跡、郡遺跡、鮎川遺跡、東奈良遺跡、中条小学校遺跡、安威古墳群は、いずれも茨木市を代表する遺跡です。これら一つ一つの調査の積み重ねが、郷土の歴史的遺産として広く活用されることを願ってやみません。

今年度の調査の実施にあたりましても、土地所有者、施工関係者、近隣住民の皆様に、多大なご理解とご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会及び関係諸機関には、格別のご指導とご配慮を賜り、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご支援をお願い申しあげる次第です。

平成 27 年 3 月 31 日

茨木市教育委員会

教育長 八木 章治

例　言

1. 本書は、平成 26 年度国宝重要文化財等保存整備費市内遺跡発掘調査等事業（総額 8,517,746 円の内、国庫 4,258,000 円、市費 4,259,746 円）として実施した、個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。平成 26 年度事業として、平成 26 年 4 月 1 日から平成 27 年 3 月 31 日までの期間で発掘調査及び整理作業を実施した。ただし本書では、整理作業の都合から平成 26 年 1 月から同年 12 月末までに調査を終了したものについて報告する。

2. 調査の実施は、次の本市教育委員会社会教育振興課文化財係発掘調査員があたった。

木村健明、齊藤大輔、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、藤田徹也

3. 本書の執筆にあたり、調査成果は各担当者及び川村和子、それ以外は齊藤があたった。執筆分担は各文末に記す。整理作業及び編集の分担は次のとおりである。

挿図の実測・製図 | 大坪啓子、川畠康雄、川村、中川夕香

遺構写真撮影 | 各担当者

遺物写真撮影 | 中東正之

校正 | 各文章執筆者、坂田

編集 | 川村、齊藤

4. 本書で使用する標高は、T.P.（東京湾標準海水面）で記す。各挿図に掲載する表記のうち、M.N. は磁北を示す。

5. 挿図及び本文中の土色表記は、「新版標準土色帖」（小山・竹原編）に基づく。

6. 遺物、図面及び写真類は、茨木市立文化財資料館で保管する。

[茨木市立文化財資料館問い合わせ先]

〒 567 - 0861 大阪府茨木市東奈良三丁目 12 番 18 号 TEL: 072 - 634 - 3433

本文目次

序 文

例 言

第1章 地理・歴史の環境 1

1. 地理的環境
2. 歴史的環境

第2章 平成26年発掘調査一覧 3

第3章 調査成果

1. 卑礼遺跡 [MUR13 - 10] 3	9. 鮎川遺跡 [AYK14 - 1] 22
2. 宅礼遺跡 [MUR14 - 3] 7	10. 東奈良遺跡 [HN14 - 1] 24
3. 芙木遺跡 [IBK13 - 7] 9	11. 中条小学校遺跡 [CJS14 - 1.2]	
4. 芙木遺跡 [IBK14 - 5] 13	東奈良遺跡 [HN14 - 3,4,5,7]	
5. 信賀遺跡 [HKA13 - 3] 15	中条小学校・東奈良遺跡	
6. 信賀遺跡 [HKA14 - 1] 17	[CJS - HN14 - 1] 26
7. 郡 遺 跡 [KOR14 - 1] 19	12. 安威古墳群 [AIK14 - 1] 29
8. 郡 遺 跡 [KOR14 - 3] 21		

挿図目次

図 1 芙木市周辺地形図 1	図26 HKA14 - 1出土土器実測図 18
図 2 平成26年発掘調査地位置図 4	図27 KOR14 - 1位置図 19
図 3 MUR13 - 10位置図 5	図28 郡遺跡周辺地形 19
図 4 卑礼遺跡周辺地形 5	図29 KOR14 - 1遺構平面・断面図 20
図 5 MUR13 - 10南壁断面図 6	図30 KOR14 - 3位置図 21
図 6 MUR13 - 10出土土器実測図 6	図31 KOR14 - 3遺構平面・断面図 21
図 7 MUR14 - 3位置図 7	図32 AYK14 - 1位置図 22
図 8 卑礼遺跡周辺地形 7	図33 鮎川遺跡周辺地形 22
図 9 MUR14 - 3土層断面図 8	図34 AYK14 - 1柱状図 23
図10 MUR14 - 3出土土器実測図 8	図35 AYK14 - 1出土土器実測図 23
図11 IBK13 - 7位置図 9	図36 HN14 - 1位置図 24
図12 芙木遺跡周辺地形 9	図37 東奈良遺跡周辺地形 24
図13 IBK13 - 7第1面遺構平面・断面図 10	図38 HN14 - 1遺構平面・断面図 25
図14 IBK13 - 7第2面遺構平面図 10	図39 HN14 - 1出土土器実測図 25
図15 IBK13 - 7出土遺物実測図 11	図40 CJ - HN位置図 26
図16 IBK14 - 5位置図 13	図41 中条小学校遺跡・東奈良遺跡周辺地形 26
図17 芙木遺跡周辺地形 13	図42 CJ14 - 1遺構平面・断面図 27
図18 IBK14 - 5遺構平面・断面図 14	図43 CJ14 - 1出土土器実測図 27
図19 IBK14 - 5出土土器実測図 14	図44 CJ14 - 2遺構平面・断面図 27
図20 HKA13 - 3位置図 15	図45 HN14 - 2遺構平面・断面図 28
図21 信賀遺跡周辺地形 15	図46 HN14 - 7出土土器実測図 28
図22 IBK13 - 3面断面・断面図 16	図47 AIK14 - 1位置図 29
図23 HKA13 - 3出土遺物実測図 16	図48 安威古墳群周辺地形 29
図24 HKA14 - 1位置図 17	図49 AIK14 - 1遺構平面・断面図 30
図25 HKA14 - 1平面・断面図 17		

写真図版目次

図版 1 卑礼遺跡 上: MUR13 - 10区 南壁 下: MUR13 - 10区 各遺構出土土器	
図版 2 卑礼遺跡 上: MUR14 - 3区 1区東壁断面（西から） 中: MUR14 - 3区 2区東壁断面（西から） 下: MUR14 - 3区 包含層出土土器	
図版 3 芙木遺跡 上: IBK13 - 7区 1区第1面全景（西から） 中: IBK13 - 7区 1区第2面全景（東から） 下: IBK13 - 7区 北壁	
図版 4 芙木遺跡 上: IBK13 - 7区 2区第1面全景（西から） 中: IBK13 - 7区 2区第2面全景（西から） 下: IBK13 - 7区 北壁	
図版 5 芙木遺跡 上: IBK13 - 7区 1区SK1・2・6、SD5、 2区出土遺物 下: IBK13 - 7区 1区出土遺物	
図版 6 芙木遺跡 上: IBK14 - 5区 トレンチ全景（北東から） 下: IBK14 - 5区 各遺構出土土器	
図版 7 信賀遺跡 上: HKA13 - 3区 トレンチ全景（南から） 下: HKA13 - 3区 SD1、包含層出土土器	

図版 8 信賀遺跡 上: HKA13 - 3区 SP1、SD1、SD4出土須恵器 下: HKA13 - 3区 SD1・3、包含層出土須恵器	
図版 9 信賀遺跡 上: HKA14 - 1区 トレンチ全景（東から） 下: HKA14 - 1区 各遺構出土土器	
図版10 郡遺跡 上: KOR14 - 1区 トレンチ全景（北から） 下: KOR14 - 3区 トレンチ全景（北から）	
図版11 鮎川遺跡 上: AYK14 - 1区 調査区近景（東から） 中: AYK14 - 1区 北壁断面 下: AYK14 - 1区 出土土器	
図版12 東奈良遺跡 上: HN14 - 1区 北壁 下: HN14 - 1区 各遺構出土土器	
図版13 中条小学校遺跡・東奈良遺跡 上: CJS14 - 1区 トレンチ全景（北から） 中: CJS14 - 1区 西壁 下: HN14 - 7区 トレンチ全景（北から）	
図版14 中条小学校遺跡 上: CJS14 - 2区 トレンチ全景（北から） 下: CJS14 - 2区 西壁	
図版15 安威古墳群 上: AIK14 - 1区 トレンチ全景（西から） 下: AIK14 - 1区 SD1（西から）	

第1章 地理・歴史的環境

1. 地理的環境（図1）

茨木市は、大阪府東北部に流れる淀川の北、老の坂山麓に広がる三島平野の一角に位置する。昭和23年（1948）に茨木町、春日村、三島村、玉櫛村の一町三村が合併して市制を施行後、昭和29年（1954）に安威村、玉島村、昭和30年代に福井村、石河村、見山村、清溪村、箕面市の一部、三宅村を編入して現在の市域が形成された。市域は、南北17km、東西10kmと南北に細長く、東は高槻市、西は吹田市、箕面市、豊能町、南は摂津市、北は老の坂山地を挟んで京都府亀岡市と接する。豊能町との境には竜王山（標高約510m）や石堂ヶ丘（標高約680m）がそびえ、これらが発する安威川、佐保川、茨木川、勝尾寺川が市内を南流する。また、市南部に安威川と茨木川が形成する古扇状地、淀川右岸に低平な沖積平野が展開するなど、多彩な地形的様相をみせる。[齊藤]

2. 歴史的環境

旧石器時代 太田や上穂積、安威川東岸の高槻市郡家今城遺跡や塚原遺跡で、国府型ナイフ形石器が発見されている。

縄文時代 東奈良遺跡から、前期末頃の爪形文土器片、後・晚期の石棒が出土しているが、遺構に伴うものではない。他には、太田遺跡や西福井遺跡、総持寺遺跡、新庄遺跡、郡遺跡等で土器が出土している。晚期の耳原遺跡は、西に茨木川、東に安威川が流れる標高約23mの洪積台地上にあり、深鉢棺16基が確認された。同時期とみられる牟礼遺跡は安威川の右岸にあり、路の水をせき止める堰が検出された。

弥生時代 淀川中流域の平野部にある東奈良遺跡、郡遺跡、目垣遺跡で、前期前半の拠点集落が形成された。これらは中期以降に大規模化し、中条小学校遺跡、駅前遺跡、信賀遺跡、中河原遺跡等の分村が現れる。その他、丘陵部周辺に見付山遺跡、太田遺跡、宿久庄遺跡、低地平野部にも舟木遺跡、溝昨遺跡等の小規模集落が出現し、拠点集落との階層分化が想定されている。

東奈良遺跡は、二重の弥生時代環濠をもつ北摂の拠点集落である。環濠の内側では竪穴式住居や掘立柱建物、外側でも弥生前期の方形周溝墓などが確認されており、銅鐸の石製鋤型、銅戈やガラス製勾玉の鋤型、輪の羽口、舌を伴う小銅鐸等が出土している。明治時代には、吹田市山田別所でも銅鐸が一点出土しており、東奈良遺跡とその周辺に鋳造技術集団がいたことを示す。東奈良遺跡の「第2号水流式銅鐸鋤型」で作られた銅鐸は、大阪府豊中市桜塚原田神社や香川県善通寺市我孫師山で出土しており、本遺跡の鋳造技術集団が西日本の銅鐸文化の一端を担ったことをうかがわせる。

市中央部の西田中町から春日四丁目と五丁目に広がる倍賀遺跡では、平成3年（1991）度の調査で弥生中期の土器廐棄土坑や方形周溝墓群が検出されたほか、弥生中・後期の大溝から銅鐸形土製品が出土し

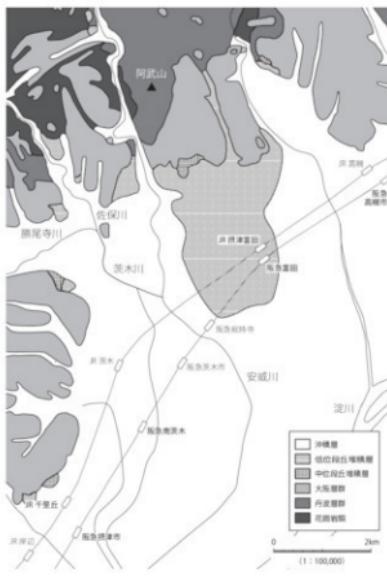


図1 茨木市周辺地形図

た。方形周溝墓は、北西に隣接する郡遺跡のものとあわせて総数 80 基以上が確認されている。

古墳時代 前期では、佐保川右岸の丘陵上に紫金山古墳（前方後円墳・約 102m）、佐保川と安威川が挟む丘陵上に将軍山古墳（前方後円墳・全長 107m）、安威川左岸の丘陵上に高槻市弁天山古墳群等が造られた。紫金山古墳では、後円部中央の竪穴式石室内から、銅鏡 12 面や甲、武器、農工具、車輪石、貝輪、筒形銅器等、豊富な副葬品が出土した。将軍山古墳の後円部中央の竪穴式石室は盗掘されているが、刀剣や玉類が出土した。墳丘には葺石が敷かれ、円筒・形象埴輪が樹立された。また、安威四丁目付近、安威川右岸の桃園山丘陵上東西約 700m の範囲には、前期から後期にかけて安威古墳群が営まれた。西端の 0 号墳（前期、円墳・15m）では、1 号粘土櫛から斜縁一仙五獸鏡、2 号粘土櫛から平縁四獸鏡が出土している。

中期の太田茶臼山古墳（226m）は三島地域最大の前方後円墳であり、継体陵に治定されている。太田茶臼山古墳周辺には、同時期の小規模古墳 43 基が密集する。これらの古墳の埴輪は、高槻市今城塚古墳と同じく、新池埴輪窯で作られたものである。

後期では、南塚古墳、青松塚古墳及び海北塚古墳が、甲冑や装飾大刀、金銅装馬具等を副葬する有力墳として名高い。このうち南塚古墳（前方後円墳・50m）は、三島最古の横穴式石室を主体部とする。その他、耳原古墳は三島地域最大の横穴式石室を主体部とし、石室内に 2 基の石棺を安置する。

終末期には、阿武山古墳や初田 1 号墳、上寺山古墳等が築造された。阿武山山頂近くにある阿武山古墳は、墳丘は高槻と茨木の市境にまたがり、石室は高槻市側にある。石室には麻布を漆で塗り重ねた夾紵棺を安置する。棺内には玉枕や金糸等が副葬され、藤原鎌足の墓とする説が有力である。

古代・中世・近世 古代の摂津国には 12 の郡があり、茨木はこのうち島下郡に属した。島下郡は、新野・宿人（宿久か？）・安威・穂積の四郷からなり、現在でも市内には郡や郡山等の地名が残る。平安時代の茨木市域の多くは藤原氏の莊園だったが、「いばらき」の地名がみえる文献上最古の記録は、鎌倉初期の正治元年（1200）11 月 3 日の神國正田地売券に記された「嶋下郡中条茨木村四条七里六坪」である。

名神高速道路インターチェンジ付近に広がる郡遺跡の周辺は、その地名から郡衙跡を含むと考えられているが、確証は得られていない。しかしながら、昭和 52 年（1977）には遺跡の東側にあたる畠町で、7 世紀前半以降に作られた井戸から「大」の字を刻んだ須恵器が出土している。識字層の存在、ひいては郡衙との関係を示唆する資料である。

7 世紀後半には、太田庵寺、穂積庵寺、三宅庵寺等の寺院が建立された。太田庵寺からは、舍利用具一式を収めた塔婆心礎や複子葉弁軒丸瓦、忍冬唐草文軒平瓦等が出土している。

茨木遺跡は、市中心部の阪急京都線茨木市駅の北西に近接し、上泉町、東宮町、片桐町、本町、元町、大手町に広がる中・近世の集落跡を主体とする。遺跡内の中央西側にある茨木小学校は、茨木城跡地と考えられており、周囲で堀が確認されている。平成 18 年（2006）度の調査でも、掘から織豊期の築欄間や戸板などの建具、江戸時代の瓦や陶磁器が出土しており、慶長 20 年（1615）の一国一城令によって打ち捨てられたものと考えられている。

西国街道は、京都と西国を結ぶ道として、淀川をはじめとする水上交通とともに重要な交通路であった。戦国から安土桃山時代にかけては、三好長慶や豊臣秀吉らの軍用道路としての役割も果たしたほか、江戸時代の参勤交代にも使われた。また、宿河原町には史跡郡山宿本陣が、元禄 9 年（1696）から明治 3 年（1870）までの宿帳とともに残されている。郡山宿本陣は、御成門のそばにあった椿の木がにちなんで「椿の本陣」とも呼ばれ、今日なお人々に親しまれている。〔齊藤〕

参考文献

茨木市教育委員会 1990『わがまち茨木』古墳編

茨木市教育委員会 1998『茨木の史跡』

茨木市史編さん委員会 2004『新修茨木市史』第 8 卷 史料編 地理 茨木市

茨木市史編さん室 2008『将軍山古墳群』II - 考古学資料調査報告集 2 - 新修茨木市史史料集 12 茨木市

茨木市役所 1978『茨木市史復刻版』

第2章 平成26年発掘調査一覧

No.	遺跡名【略号】	調査地	期間	担当	面積	備考
1	牟礼遺跡【MUR13・10】	中津町	H26. 1. 6	木村	5 m ²	本書所収 (p. 5)
2	平田遺跡【HRT13・1】	平田二丁目	H26. 1. 16	木村	3.75 m ²	遺構・遺物なし
3	鮎川遺跡【AYK13・1】	鮎川二丁目	H26. 1. 17	木村	8.5 m ²	遺構・遺物なし
4	茨木遺跡【IBK13・7】	宮元町	H26. 3. 12	木村	6 m ²	本書所収 (p. 9)
5	倍賀遺跡【HKA13・3】	春日四丁目	H26. 3. 17	富田	9 m ²	本書所収 (p. 15)
6	春日遺跡【KSG13・8】	上穂積町	H26. 3. 24	富田	7.5 m ²	遺構・遺物なし
7	郡遺跡【KOR14・1】	郡五丁目	H26. 4. 7	齊藤・高村	12 m ²	本書所収 (p. 19)
8	東奈良遺跡【HN14・1】	東奈良二丁目	H26. 4. 10～ H26. 4. 11	齊藤・高村	9 m ²	本書所収 (p. 24)
9	郡遺跡【KOR14・2】	郡五丁目	H26. 5. 12	高村	4 m ²	遺構・遺物なし
10	郡遺跡【KOR14・3】	郡五丁目	H26. 5. 13	高村	4 m ²	本書所収 (p. 21)
11	鮎川遺跡【AYK14・1】	鮎川二丁目	H26. 6. 10～ H26. 6. 12	齊藤・高村	8 m ²	本書所収 (p. 22)
12	中穂積遺跡【NHZ14・1】	中穂積一丁目	H26. 6. 24	高村	4 m ²	遺構・遺物なし
13	上中条遺跡【KCJ14・5】	上中条一丁目	H26. 7. 2	坂田	4.6 m ²	遺構・遺物なし
14	東奈良遺跡【HN14・3】	新中条町	H26. 7. 23	高村	6 m ²	本書所収 (p. 26)
15	東奈良遺跡【HN14・4】	新中条町	H26. 7. 24	高村	4 m ²	本書所収 (p. 26)
16	中条小学校遺跡【CJS14・1】	新中条町	H26. 7. 24	高村	6 m ²	本書所収 (p. 26)
17	中条小学校遺跡【CJS14・2】	新中条町	H26. 7. 25	高村	6 m ²	本書所収 (p. 26)
18	東奈良遺跡【HN14・5】	新中条町	H26. 7. 28	高村	6 m ²	本書所収 (p. 26)
19	中条小学校遺跡・ 東奈良遺跡【CJS・HN14・1】	新中条町	H26. 7. 29	高村	6 m ²	本書所収 (p. 26)
20	茨木遺跡【IBK14・5】	大手町	H26. 7. 23～ H26. 7. 24	齊藤	10.2 m ²	本書所収 (p. 13)
21	春日遺跡【KSG14・2】	上穂東町	H26. 8. 22	木村	11.5 m ²	遺構・遺物なし
22	東奈良遺跡【HN14・7】	新中条町	H26. 8. 25	木村	6 m ²	本書所収 (p. 26)
23	牟礼遺跡【MUR14・2】	園田町	H26. 9. 1	齊藤	4.8 m ²	遺構・遺物なし
24	牟礼遺跡【MUR14・3】	園田町	H26. 9. 18	木村	12.25 m ²	本書所収 (p. 7)
25	中条小学校遺跡【CJS14・4】	奈良町	H26. 9. 24	齊藤	3 m ²	遺構・遺物なし
26	牟礼遺跡【MUR14・5】	園田町	H26. 10. 1	富田	9 m ²	遺構・遺物なし
27	倍賀遺跡【HKA14・1】	春日四丁目	H26. 10. 6	富田	9 m ²	本書所収 (p. 17)
28	牟礼遺跡【MUR14・6】	園田町	H26. 10. 11	藤田	4 m ²	遺構・遺物なし
29	中条小学校遺跡【CJS14・6】	下中条町	H26. 10. 27～ H26. 10. 28	齊藤	8.75 m ²	遺構・遺物なし
30	中条小学校遺跡【CJS14・7】	下中条町	H26. 10. 29	齊藤	4.5 m ²	遺構・遺物なし
31	玉櫛遺跡【TMK14・3】	玉櫛二丁目	H26. 10. 30	富田	6 m ²	遺構・遺物なし
32	牟礼遺跡【MUR14・8】	中村町	H26. 11. 11	齊藤	6 m ²	遺構・遺物なし
33	玉櫛遺跡【TMK14・4】	玉櫛一丁目	H26. 11. 12	齊藤	7.5 m ²	遺構・遺物なし
34	安威古墳群【AIK14・1】	安威三丁目	H26. 11. 26～ H26. 11. 27	藤田	15 m ²	本書所収 (p. 29)
35	鮎川遺跡【AYK14・2】	鮎川三丁目	H26. 12. 8	高村	6 m ²	遺構・遺物なし

*No.は図2に対応するが、第3章の報告順とは対応しない。

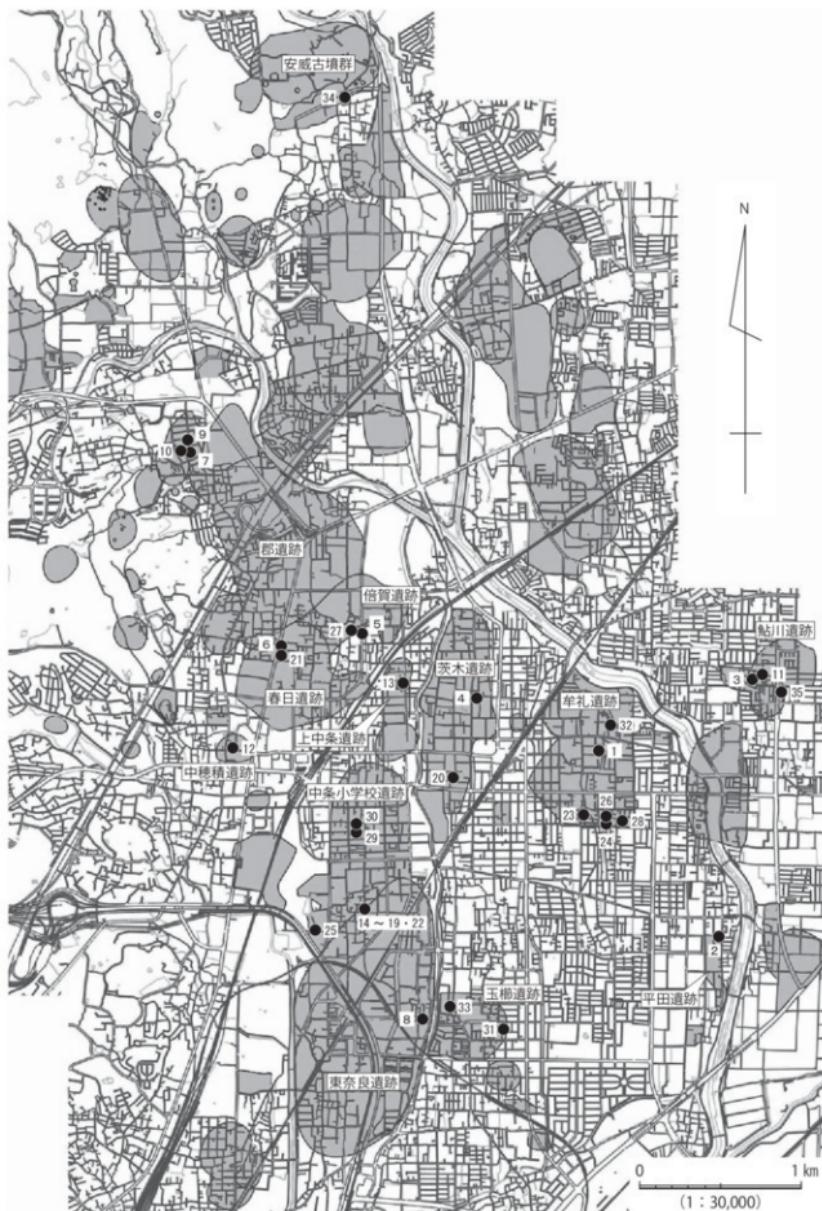


図2 平成26年発掘調査地位置図

第3章 調査成果

1. 牟礼遺跡 [MUR13 - 10]

調査地 | 中津町

調査期間 | 平成 26 年 1 月 6 日

調査担当 | 木村健明

はじめに 中津町で計画された個人住宅建築に伴い、平成 26 年 1 月 6 日に約 5m の調査を実施した。以下、調査成果の概要を報告する。

基本層序（図 5） 現地表面の標高は 10.2m 前後を測る。盛土（厚さ 1.0m）の下に黒色粗砂混じり粘質シルト層（旧耕作土・厚さ 10cm）、緑灰色粘土層（厚さ 25cm）がある。調査区の東側はその下に灰黄色粗砂からなる流路を確認した。西側では、流路に切られて暗灰黄色粘質シルト層（厚さ 10cm）、黒褐色粗砂混じり粘質シルト層（厚さ 20cm・包含層）、暗灰色粘土層（厚さ 20cm・包含層）、オリーブ灰色粘土層（厚さ 10cm 以上）が存在する。

遺構 今回の調査では、湧水が著しかったこともあり、遺構は確認できなかった。ただし第 8 層の包含層（暗灰色粘土層）は壁面で溝状に落ち込んでおり、遺構埋土となる可能性もある。

遺物（図 6） 遺物は第 7・8 層から出土している。上層（第 7 層）からは、瓦器・土師器などが、下層（第 8 層）からは黒色土器・土師器が出土している。

第 7 層出土遺物（1～12） 1～6 は土師器皿である。1 は口縁部が底部から屈曲して立ち上がる。2 は口縁端部が直立する。3 は口縁端部がヨコナデにより外方へ屈曲しながら立ち上がる。4～6 は「て」の字状口縁をもつ。4 は薄手で、端部は斜めにつまみ上げる。5 はやや厚手である。口縁端部は上方につまみ上げる。6 は厚手である。口縁部の屈曲は小さい。口縁端部は部分的に上方につまみ上げるが、丸く收める箇所もある。7 は土師器椀である。焼成不良の瓦器椀の可能性もある。断面台形状の高台をもつ。8・

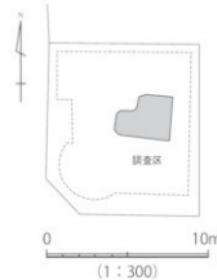


図 3 MUR13-10 位置図

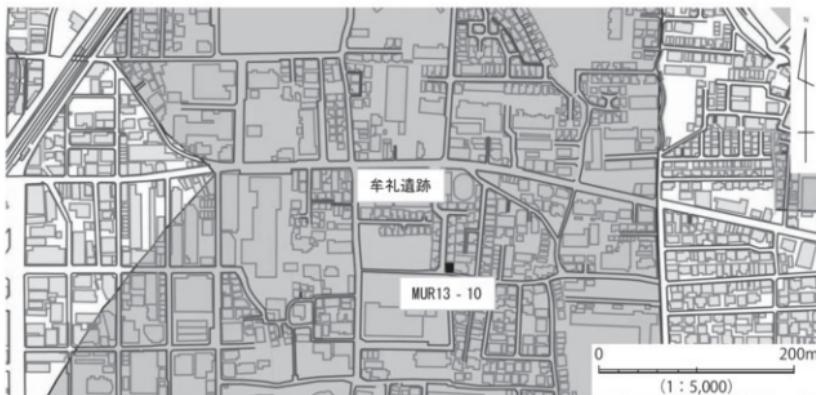
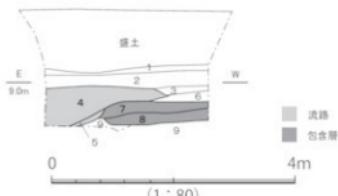


図 4 牟礼遺跡周辺地図



- 1 黒色 (10V2/1) 粗砂混じり粘質シルト (旧耕土)
- 2 緑灰色 (10G5/1) 粘土
- 3 喬絆灰色 (7.5G4/1) 粗砂混じり粘質シルト
- 4 黄色 (2.5Y6/2) 粗砂 (下層は鉄分沈着)
- 5 青灰色 (5BG5/1) 粘土
- 6 喬絆黄色 (2.5Y4/2) 粘質シルト (マンガン粒多く含む)
- 7 黒褐色 (2.5Y3/1) 粗砂混じり粘質シルト (鉄分沈着・包含層)
- 8 喬絆灰色 (N3) 粘土 (包含層)
- 9 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 粘土

図 5 MUR13-10 南壁断面図

上げ、尖り気味に仕上げる。15・16は黒色土器B類楕である。15は口縁端部内面に沈線一条を施す。内面に密なミガキ、外面に粗いミガキを施す。16は底部である。断面台形状の低い高台をもつ。内面に密なミガキを施す。

まとめ 今回の調査では、遺構を確認するには至らなかったが、流路によって中世の包含層が削りとらわれていることが確認できた。包含層は2層存在し、上層の包含層(7層)は12世紀前半～13世紀代の、下層の包含層(8層)は11世紀代の遺物を含む。11世紀から13世紀頃にかけて、周辺に集落が営まれていたと考えられる。埋没深度が深いため、個人住宅建築に伴う小規模な調査では、様相を把握するのは困難であるが、今後も調査を継続していくことで、遺跡の状況が明らかになってくるであろう。[木村]

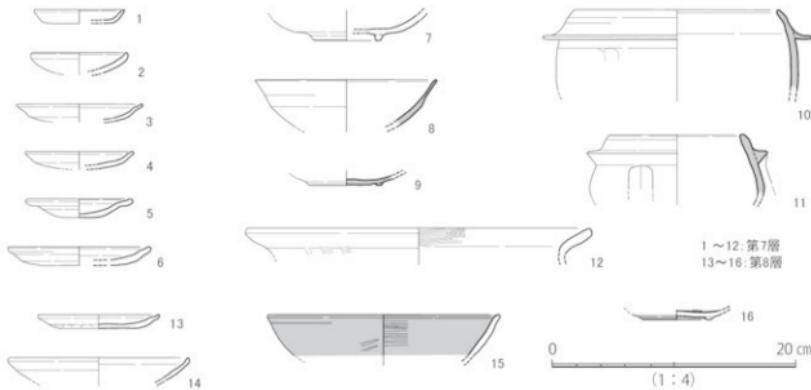


図 6 MUR13-10 出土土器実測図

2. 牽礼遺跡 [MUR14 - 3]

調査地 | 岡田町

調査期間 | 平成 26 年 9 月 18 日

調査担当 | 木村健明

はじめに 岡田町で計画された個人住宅建築に伴い、申請建物の西側（ $2m \times 3m$ の $6m^2$ ）と東側（ $2.5m \times 2.5m$ の $6.25m^2$ ）の 2か所、合計約 $12.25m^2$ の調査を実施した。西側を 1 区、東側を 2 区として調査を行った。

基本層序 (図 9) 現地表面の標高は $7.2m$ 前後を測る。現地表 (G.L.) – $1.1m$ まで盛土である。以下にはまず、黒色粘質シルト（旧耕土・厚さ $0.15m$ ）、暗オリーブ灰色粗砂混じり粘土（厚さ $0.15m$ ）、灰色粗砂（厚さ $0.2m$ ）が認められる。灰色粗砂層以下に一部異なる部分があり、1 区では、明黄褐色微砂（厚さ $0.1m$ ）、灰色粘土（厚さ $0.15m$ ・鉄分を斑状に含む）、2 区では灰色粘質シルト混じり粗砂（厚さ $0.2m$ ）が存在する。以下は再び共通の層序で、灰色粘土（厚さ $0.1 \sim 0.2m$ ）、黒褐色粘土（厚さ $0.2m$ ・包含層）、灰色粘土（厚さ $0.3m$ 以上）であった。包含層の上面の標高は T.P. + $5.3m$ ~ $5.4m$ である。

遺構 遺構は調査区が狭小であったことと、湧水が著しかったことから、面的に検出を行うことができず、確認できなかった。

遺物 (図 10) 1 区の黒褐色粘土層（包含層）から中世の土師器皿が出土した。遺物は包含層出土の 4 点を図示した。1 ~ 3 は土師器皿である。1 は口径 $9.0cm$ 、器高 $1.4cm$ を測る厚手の皿である。口縁端部に二段のヨコナデを施す。2 は口径 $9.0cm$ 、残存高 $0.9cm$ を測る。扁平な器形を呈する。口縁部はヨコナデにより底部から屈曲して立ち上がる。3 は小片のため口径は不明で、残存高は $1.2cm$ を測る。口縁部はヨコナデを施し、底部外間に指オサエを施す。焼成は堅緻である。4 は黒色土器杯である。小片のため口径は不明で、残存高は $3.5cm$ 程度を測る。外面部及び内面が黒色を呈する。口縁部にヨコナデを施し、外方

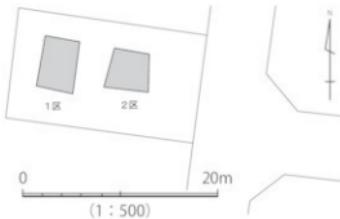


図 7 MUR14 - 3 位置図

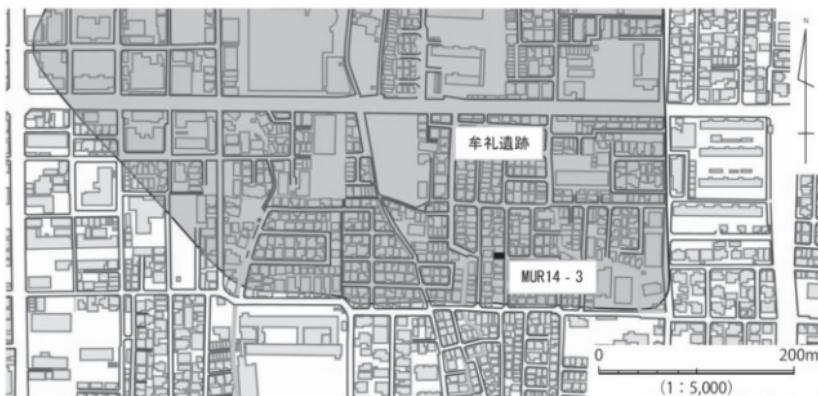


図 8 牽礼遺跡周辺地図

へつまみだす。図示した遺物はいずれも小片で、量が少ないので、詳細な時期は判断しづらいが、包含層の堆積時期は10世紀半ば頃と考えられる。

まとめ 今回の調査は、申請建物の東西2か所に調査区を設定して行った。その結果、ほぼ同様の層序を確認し、現地表下1.8m～1.9mのT.P.+5.3m～5.4mで包含層の上面を確認した。包含層は厚さ0.2m程度を測り、中世の遺物を含んでいる。

牟礼遺跡は縄文時代晚期から弥生時代にかけての水田や堰が発見されたことで著名であるが、個人住宅建築に伴う小規模な調査では、それらに関する深さまで掘削を行うことは困難である。しかし、最近の調査で中世の遺物包含層の分布が遺跡内の各所で確認されていることから、継続して調査を行うことで、いまだ不明瞭である中世の牟礼遺跡の様相をうかがうことができるようになると思われる。[木村]

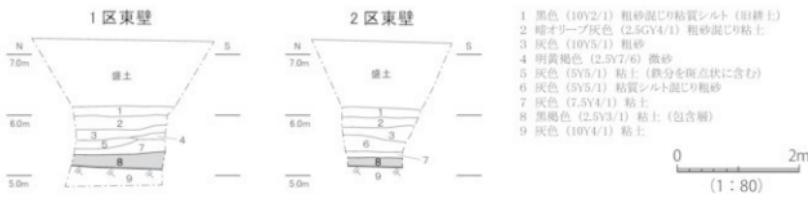


図9 MUR14-3 土層断面図

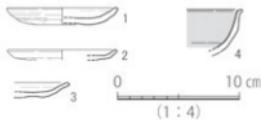


図10 MUR14-3 出土土器実測図

3. 茨木遺跡 [IBK13-7]

調査地 | 宮元町

調査期間 | 平成 26 年 3 月 12 日

調査担当 | 木村健明

はじめに 宮元町で計画された個人住宅建築に伴い、平成 26 年 3 月 12 日に申請建物の東西に 2 か所の調査区（1 区・2 区）を設定して、合計約 6m² の調査を実施した。

基本層序 現地表面の標高は 10.3m 前後を測る。1 区では厚さ 30cm の盛土があり、以下炭化物・焼土を含む灰黄色粘質シルト（厚さ 10cm・整地土）、黃灰色粘質シルト（厚さ 30cm）がありこの層上面で第 1 面（標高 9.5m）を検出した。また以下は灰色粘質シルト（厚さ 40cm）、にぶい黄橙色粗砂（厚さ 10cm 以上）があり、上面で第 2 面（標高 8.9m）を検出した。2 区では、厚さ 30cm の盛土があり、炭化物を含む暗灰色粘質シルト（厚さ 10cm・整地土）、灰色粘質シルト（厚さ 10cm）、黃灰色粘質シルト（厚さ 30cm）があり、この層上面で第 1 面（標高 9.8m）を検出した。また以下は褐灰色粘質シルト（厚さ 10cm）、黃灰色粘質シルト（厚さ 20cm）、灰色粘質シルト（厚さ 10cm）があり、この層下面で第 2 面（標高 9.0m）を検出した。

遺構(図 13・14) 今回の調査では、2 面の遺構面を確認し、調査を行った。第 1 面では 1 区で 1 基(SK2)、2 区で 2 基の土坑 (SK3・4) を検出した。なお SK1 は盛土直下から切り込む土坑であり、第 1 面より新しい遺構である。検出長 70cm、検出幅 30cm、深さ 70cm を測る。埋土から陶器が出土している。

SK2 は検出長 50cm、検出幅 30cm、深さ 40cm を測る。陶器が出土した。SK3 は検出長 150cm、検出幅 60cm、深さ 36cm を測る。遺物は出土していない。SK4 は遺構の西端を確認したにとどまる。

第 2 面では 1 区で土坑 1 基 (SK6)、溝 1 条 (SD5)、2 区では溝 2 条 (SD7・8) を検出した。SK6 は長

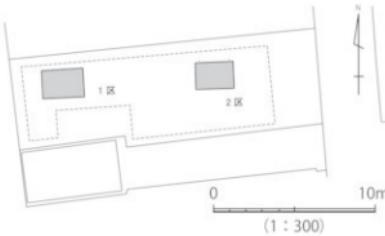


図 11 IBK13-7 位置図



図 12 茨木遺跡周辺地図

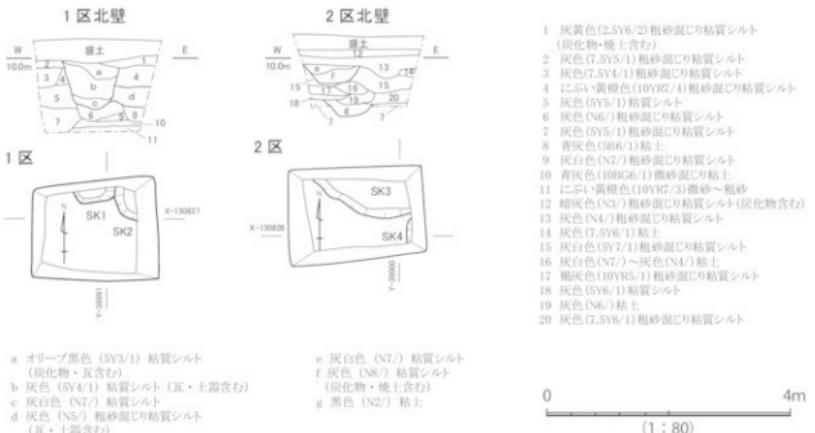


図 13 IBK13-7 第1面遺構平面・断面図

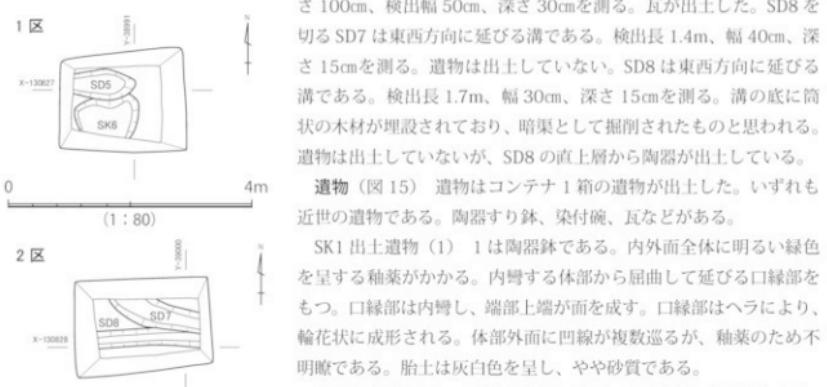


図 14 IBK13-7 第2面遺構平面図

さ 100cm、検出幅 50cm、深さ 30cm を測る。瓦が出土した。SD8 を切る SD7 は東西方向に延びる溝である。検出長 1.4m、幅 40cm、深さ 15cm を測る。遺物は出土していない。SD8 は東西方向に延びる溝である。検出長 1.7m、幅 30cm、深さ 15cm を測る。溝の底に筒状の木材が埋設されており、暗渠として掘削されたものと思われる。遺物は出土していないが、SD8 の直上層から陶器が出土している。

遺物 (図 15) 遺物はコンテナ 1 箱の遺物が出土した。いずれも近世の遺物である。陶器すり鉢、染付碗、瓦などがある。

SK1 出土遺物 (1) 1 は陶器鉢である。内外面全体に明るい緑色を呈する釉薬がかかる。内縫する体部から屈曲して延びる口縁部をもつ。口縁部は内縫し、端部上端が面を成す。口縁部はヘラにより、輪花状に形成される。体部外面に凹線が複数巡るが、釉薬のため不明瞭である。胎土は灰白色を呈し、やや砂質である。

SK2 出土遺物 (2) 2 は陶器急須である。内面全体に釉薬がかかる。外面に粘土粒を貼り付けた脚が残存する。外面に煤が付着する。

SD5 出土遺物 (3) 3 は平瓦である。凹面はナデ、凸面は格子状タタキを施す。色調は橙色を呈する。図の凸面上側は当時の面ではないと思われるが、部分的に平滑になつておらず、何らかの加工を施した可能性がある。

SK6 出土遺物 (4 ~ 6) 4 ~ 5 は丸瓦、6 は平瓦である。4 は端面が一部残存する。凸面にナデ、凹面に布目痕、ナデが認められる。色調は灰色を呈する。5 は側縁が一部残存する。凹面に面取りを施す。凸面にナデ、凹面に布目痕が認められる。色調は橙色を呈する。6 は側縁が一部残存する。凸面・凹面ともにナデを施し、離れ砂が付着する。

1区第1面検出時出土遺物 (7 ~ 15) 7 は丸瓦である。凹面に面取りを施す。凸面・凹面ともにナデを施す。色調は橙色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、橙色と白色の胎土が混じる。8 は土器鉢である。口縁端部内面に面をもつ。9 ~ 11 は陶器すり鉢である。9・10 ともに口縁部が上方に延び、凹線を外面に 2 条、内面に 1 条施す。10 は内面の凹線が口縁部上端に近い位置に施す。すり目は 9 が 9 条、10 が 8

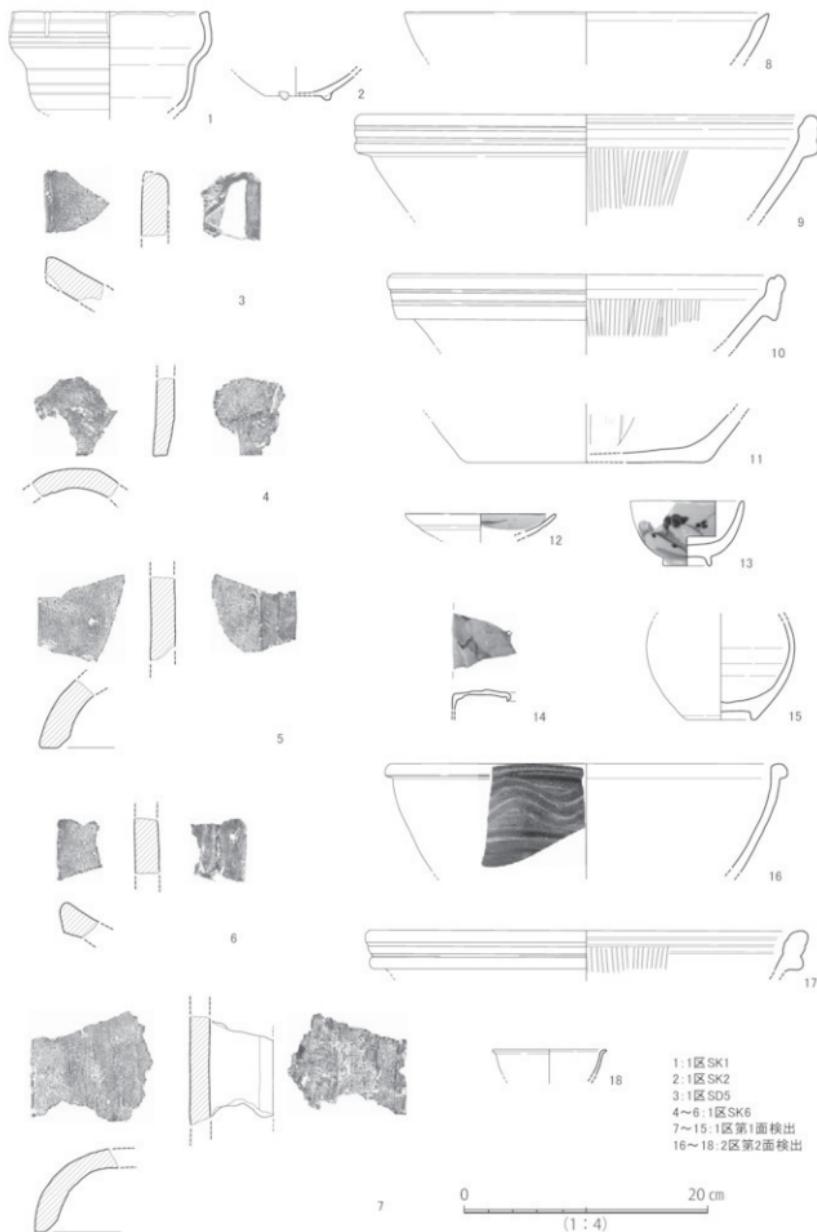


図15 IBK13-7出土遺物実測図

条を一単位として施す。11は平底の底部である。内面のすり目は著しく磨滅し、深かった部分のみ残存する。12は染付皿である。内面に文様が一部残存する。外面に凹線を1条施す。13は染付碗である。外面に花卉文様を描く。高台の外面に2条の線が巡る。14は染付水滴である。表面に菊の花と葉を立体的に表現する。部分的に呉須の線がある。孔が部分的に残存する。内面はユビナデによる整形痕跡が残る。15は磁器瓶である。徳利の底部と考えられる。外面に文様は認められない。高台端部のみ露胎である。内面はケズリが認められる。底部中央に直径2cm程度の円形に釉が認められる部分があり、口径を反映している可能性がある。

2区第2面検出時出土遺物（16～18）16は陶器鉢である。内外面に暗灰黄色の釉薬をかける。外面に波状の文様を描く。口縁端部は外方へ折り曲げ上面及び内面は面を成す。破断面の片側に漆と思われる物質が付着しており、一度破損した後修復して使用されていたと思われる。17は陶器すり鉢である。口縁部が上方に延び、凹線を外面に2条、内面に1条施す。すり目は9条一単位で施す。18は陶器碗である。口縁端部がわずかに外反する。内外面ともに施釉する。第2面SD8の直上から出土した。

まとめ 今回の調査では、遺構面を2面確認したが、検出した遺構はいずれも近世に属するものであった。今回の調査地の北東60m地点で行われた茨木遺跡13・5調査では、7世紀の溝を検出しているが、今回は近世以前の遺構を確認することはできなかった。[木村]

4. 茶木遺跡 [IBK14 - 5]

調査地 | 大手町

調査期間 | 平成 26 年 7 月 23 日～24 日

調査担当 | 齊藤大輔

はじめに 大手町で計画された個人住宅建築に先立ち確認調査を行ったところ、遺構・遺物を検出したため、本発掘調査を実施した。掘削面積は 10.2m²である。

基本層序・遺構（図 18） 調査区の南壁を確認すると、東側の G.L. - 0.2m ～ - 0.45m 程まで現代の盛土である。調査区東半分では G.L. - 0.3m ～ - 0.9m の範囲で、上面の残存幅 2.4m の SD1 を検出した。

調査区西半分でも G.L. - 0.3m ～ - 1.5m の範囲で、残存幅 2.8m の SD2 を検出した。SD2 は、上面の東端が SD1 に切られる。SD2 は、A～C の 3 層からなる。A 層（G.L. - 0.2m ～ - 0.8m）は人為的かつ短期間に埋められた浅黄橙色の砂層、B 層（G.L. - 0.8m ～ - 1.0m）は鉄分の沈着と思われる黒褐色の砂層、C 層（G.L. - 1.0m 以下）も A 層同様、人為的かつ短期間に埋められた浅黄橙色の砂層である。B 層は溝の隣の包含層の上にも続き、B 層以下は、トレンチ全体にわたって平坦面をなす。

G.L. - 1.1m 程、12 層の上面で、第 1 遺構面を検出した。遺構は、SP1 ～ 5 と方形プランとみられる性格不明遺構 SX1 である。切りあい関係から、SP2 ～ 5 は SX1 よりも新しい。

G.L. - 1.27m 程、15 層の上面で、第 2 遺構面を検出した。遺構は、SP1 ～ 3 と方形プランの遺構 1 である。G.L. - 1.5m 程で、第 3 遺構面を検出した。遺構は、SP1 ～ 2 と、検出幅 50cm 程の SD1、方形プランと思われる性格不明遺構 SX1 である。第 3 遺構面の SD1 は、盛土直下で確認した SD1 ～ 2 と平行である。第 3 遺構面の遺構は、いずれも底面が水分が多く含む青灰色の砂層で、地山までは確認できなかった。

遺物（図 19） 1 は、第 1 遺構面 SP1 から出土した、土器器皿の口縁部から体部にかけての破片であ

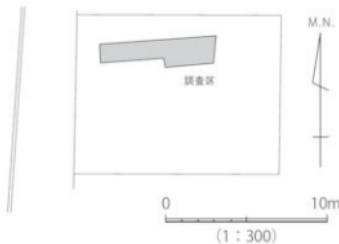


図 16 IBK14 - 5 位置図



図 17 茶木遺跡周辺地図

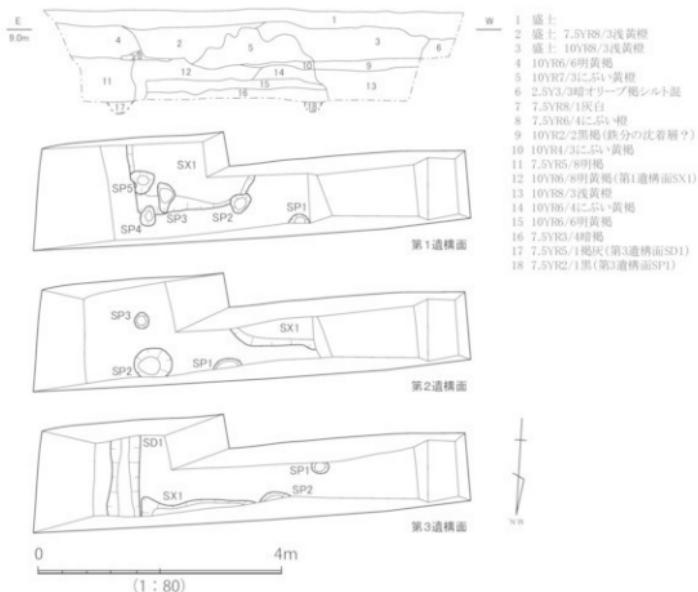


図 18 IBK14-5 平面・断面図

る。直径の約6分の1が残り、復元口径は約9.6cmである。口縁の端は内側に若干屈曲し、いわゆる「て」の字状口縁をなす。2は、第2遺構面SP2から出土した黒色土器B類椀の高台部である。高台直径の約4分の1が残り、復元径約6.6cmである。貼り付けられた高台は、断面が扁平な三角形である。見込み部には暗文を施す。焼成は良好で、胎土に角閃石が混じる。3は、SP4から出土した土師器皿で、底部を欠く。口縁部径の約5分の1が残り、復元径は約10.2cmである。内面と、外面上半部までヨコナデ、外面上半部に指オサエを施す。いずれも11世紀頃に位置づけられようか。

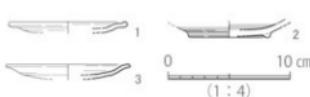


図 19 IBK14-5 出土土器実測図

まとめ 今回検出した三つの遺構面では、それぞれ柱穴や溝、性格不明遺構を確認した。南側壁面西側で確認した溝は鉄分の沈着層を挟むことから、C層を人為的に埋めたのち一定期間開放された状態であったが、溝そのものへの認識とその利用は比較的長い期間生き続けたと想定できる。この溝は、調査区の北に位置する本源寺から延びる道路と平行であり、両者の何らかの関係を示唆するが、確かな資料に恵まれていない。しかし、溝の深さに応じた面的な広がりも相当のものがあったと想定できるため、今後、今回の調査区の南北に位置する区画の調査にあたっては、この点に留意する必要があるだろう。[齊藤]

5. 倍賀遺跡 [HKA13 - 3]

調査地 | 春日四丁目

調査期間 | 平成 26 年 3 月 17 日

調査担当 | 富田卓見

はじめに 春日四丁目で計画された個人住宅建築に伴い、発掘調査を行った。調査範囲は、東西 3m × 南北 3m の 9m²である。

基本層序 今回確認した範囲においては、①盛土（層厚約 0.5m）、② 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（旧耕土・層厚約 0.15m）、③ 5GY5/1 オリーブ灰色砂混じり粘質土（床土・層厚約 0.05m）、⑤ 7.5GY5/1 緑灰色粘質土、横筋状に黄味を帯びる（層厚約 0.13m）、⑥ 灰黄褐色粘質土、極細礫・土器片を多く含む（遺物包含層・層厚約 0.13m）、⑩ 10YR6/6 明黄褐色粘土～粘質土（地山層・層厚 0.05m～）である。⑥からは、弥生時代後期の土器や須恵器・土師器を中心に出土した。⑩上面にて遺構を確認し、記録保存作業を行った。

遺構（図 22） 検出した遺構は、ピット状遺構 8 基・溝 3 条・大溝 2 条である。

ピット状遺構 合計 8 基を検出した。SP1 からは、ほぼ完形の須恵器杯身が天地逆さの状態で出土した。他の遺構からも土器片がわずかに出土しているが、極細片のため時期は不明である。

大溝 SD1 は東壁際、SD4 は西壁際で検出した。SD1 は長さ 2.2m 以上、深さ約 0.23m、SD4 は長さ 2.3m 以上、深さ約 0.27m を測り、ともにほぼ南北方向に延びている。両溝の対肩は調査区外にあるため、溝幅は不明である。両溝内の上～中層からは須恵器・土師器が、下層付近では弥生時代後期の土器片が出土しており、弥生時代後期の溝が埋没した後、古墳時代に再掘削を行った可能性も考えられる。

遺物（図 23） SP1 から 1・2 が出土した。ともに須恵器杯身である。1 は口径 12.0cm、器高 4.65cm を測り、ほぼ完形で出土した。2 は口径 12.4cm・器高 4.9cm を測る。SD1 から 3～13 が出土した。3・4 は須恵器杯蓋で、3 は口径 14.6cm、残存高 3.1cm、4 は口径 16.2cm、器高 4.15cm を測る。5～8 は須恵器杯身で、

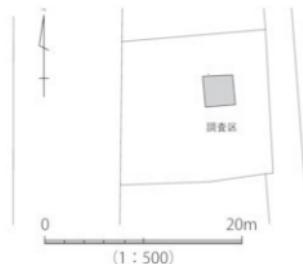


図 20 HKA13 - 3 位置図

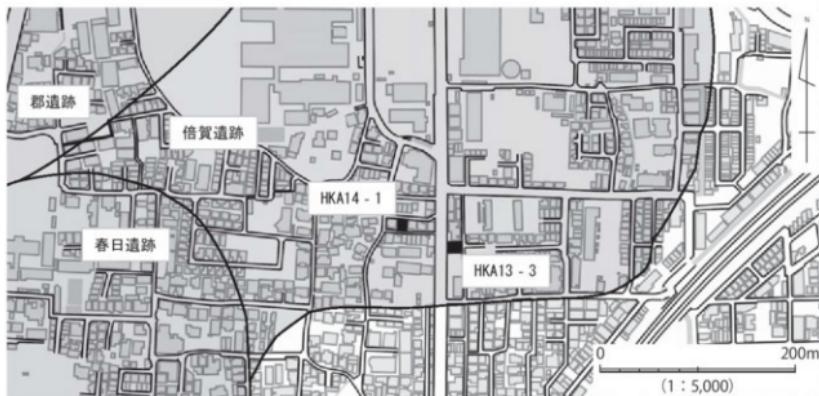


図 21 倍賀遺跡周辺地図

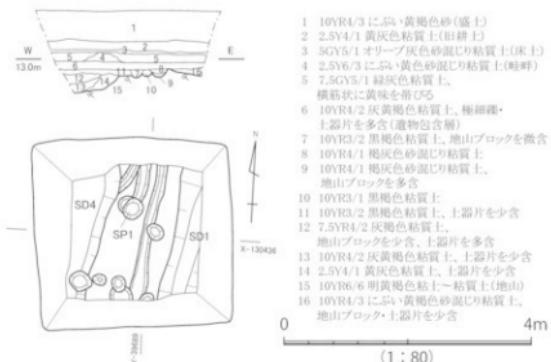


図22 HKA13-3 平面・断面図

土師器把手である。平面形が舌状を呈し、厚さ 1.7cm を測る。SD3 から 14 が出土した。14 は須恵器表で、頸部径 20.0cm を測る。外面はタタキ後にカギ目・内面は青海波文で調整されている。SD4 から 15 が出土した。15 は須恵器杯身で、口径 15.4cm・残存高 5.3cm を測る。時期は 6 世紀初頭頃であろう。遺物包含層から 16 ~ 22 が出土した。16 ~ 21 は弥生時代後期の表底部である。それぞれ外面はタタキで調整されており、底径は 3.35 ~ 5.3cm を測る。22 は須恵器高杯の脚部である。底径 7.6cm・残存高 2.5cm を測り、

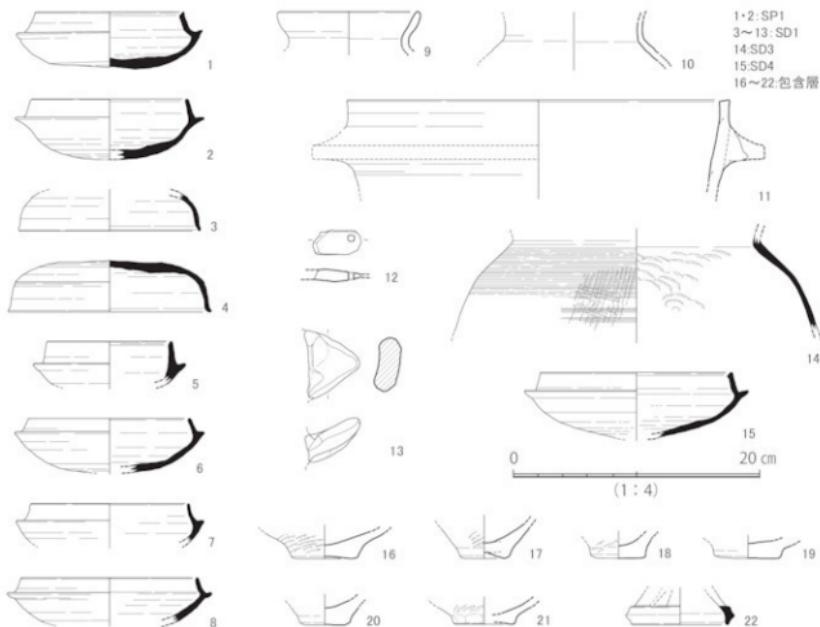


図23 HKA13-3 出土遺物実測図

5 は口径 10.0cm・残存高 3.6cm、6 は口径 12.8cm・残存高 4.4cm、7 は口径 12.8cm・残存高 3.2cm、8 は口径 14.4cm・残存高 3.6cm を測る。9 は土師器壺口縁部で、口径 11.2cm・残存高 2.7cm を測る。10 は土師器壺と思われ、頸部径 11.2cm・残存高 2.6cm を測る。11 は羽釜で、口径 31.0 cm・残存高 7.1cm を測る。12 は用途不明の土製品である。厚さ 0.9cm を測り、土器片には穿孔が見られることから土製鋤鉗車の可能性が考えられる。13 は

3方向に透かしが入ると思われる。23は器種不明で図化し得なかったものの、残存部には穿孔が認められる。写真図版のみ示しておく。

まとめ 今回の調査では、遺跡包蔵地南端に位置している当地周辺において、比較的浅い層位にて弥生時代後期～古墳時代の遺物包含層や遺構が良好な状態で残存していることを確認した。既往の調査結果によると、当該地周辺は墓域であったと考えられているが、その範囲は現在でも不確定である。今後周辺にて行われるであろう調査の結果で墓域の範囲が判明し、それに伴い周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲も拡大する可能性があるため、包蔵地近接地での調査は注意が必要である。【富田】

6. 倍賀遺跡〔HKA14-1〕

調査地 | 春日四丁目

調査期間 | 平成 26 年 10 月 6 日

調査担当 | 富田卓見

はじめに 春日四丁目 324-5 で計画された個人住宅建築に伴い、発掘調査を行った。調査範囲は、東西 3m × 南北 3m の 9m² である。

基本層序 今回確認した範囲においては、①盛土（層厚約 0.65m）、②5BG5/1 青灰色粘質土（旧耕土・層厚約 0.1m）、③2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土・上面と層中に数条の明黄褐色粘質土（床土）あり（層厚約 0.14m）、④10YR4/1 褐灰色粘質土・細礫と土器片を非常に多く含む（遺物包含層・層厚約 0.1m）、⑤10YR3/2 黒褐色粘質土（遺物包含層・層厚約 0.23m）、⑥7.5Y5/6 明褐色粘質土～粘土（地山層・層厚 0.05m～）である。⑨上面にて遺構を確認し、記録保存作業を行った。

遺構（図 25） 検出した遺構は、ピット状遺構 6 基である。SP1 は平面プランが一辺約 0.4m の方形に近い形で、深さ 0.17m を測る。遺構内からは、根石と思われる拳大の石を検出した。SP2 は一辺が約 0.25m の方形に近い形で、深さ 0.15m を測る。SP3 は径 0.25m、深さ 0.07m を測る。SP4 は径 0.2m、深さ 0.07m を測る。SP6 は一辺が 0.4m の方形で、深さ 0.51m を測る。調査区東壁の土層断面より、SP6 は上層である④層上面から掘り込まれており、埋土内の遺物より、時期は古代の範疇に収まるものと思われる。SP7 は長辺約 0.06m で不定形を呈し、深さ 0.12m を測る。

遺物（図 26） SP5 から 1 が出土した。1 は土師器の底部と思われる。器種は不明である。底径 3.2cm、残存高 2.1cm を測る。SP6 から 2～6 が出土した。2 は土師器杯で、口径 11.1cm、残存高 2.65 cm を測る。3 は土師器甕で、口径 19.6 cm、残存高 2.6cm を測る。4 は土師器杯で、残存高 2.2cm を測る。口縁端部に沈線が入る。5 は土師器甕で、残存高 2.5

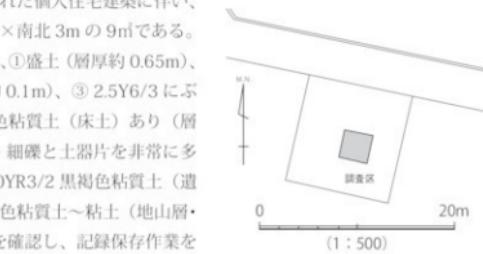


図 24 HKA14-1 位置図

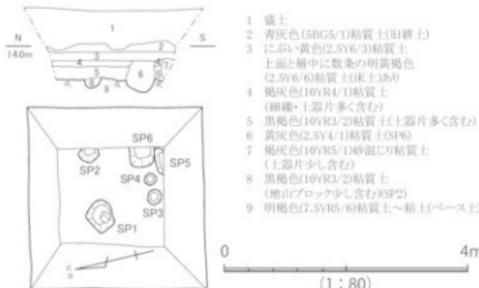


図 25 HKA14-1 平面・断面図

cmを測る。6は土師器甕の口縁部と思われ、残存高2.6cmを測る。上層の遺物包含層から7～9が出土した。7は土師器高杯で、口径16.8cm、残存高1.6cmを測る。内面はナデ後に放射状に暗文が施されている。8は須恵器壺の口縁部で、口径25.0cm、残存高2.8cmを測る。9は弥生時代後期の土器の底部片で、底径4.8cm、残存高2.7cmを測る。摩滅が激しく不明瞭だが、外面にタタキ痕が認められる。下層の遺物包含層から10・11が出土した。10は須恵器杯身で、口径12.6cm、残存高2.8cmを測る。11は、須恵器の甕もしくは壺の口縁だが、体部を欠くため器種は特定できない。頸部径11.1cm、残存高3.3cmを測り、頸部に波状文が施されている。

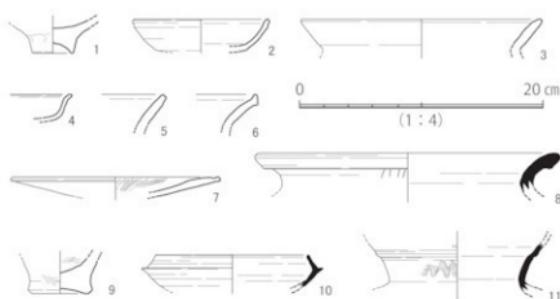


図26 HKA14-1 出土土器実測図

まとめ 今回の調査の結果、弥生時代後期から古代にかけての遺構・遺物を確認した。周辺での既往の調査でも同時期の遺構・遺物が多く確認されており、周辺は後世に破壊を受けずに良好な状態で埋蔵文化財が残存している可能性が高い。今後周辺の調査数の増加によって、当遺跡内での各時代の性格を把握することが必要である。〔富田〕

7. 郡遺跡 [KOR14 - 1]

調査地 | 郡五丁目

調査期間 | 平成 26 年 4 月 7 日

調査担当 | 齊藤大輔、高村勇士

はじめに 郡五丁目で計画された個人住宅建築に先立ち、平成 26 年 4 月 7 日に確認調査を行ったところ、G.L. - 0.3m 程で地山面及び遺構を検出したため、本発掘調査を実施した。調査面積は、3m × 4m の 12m²である。

基本層序 現地表面 (G.L.) の標高は、およそ T.P. + 28.8m である。G.L. - 0.3m まで調査した。

基本層序は、地表面から①～③の整地層からなる。①は、厚さ 15cm の 7.5YR6/8 橙色土、②は、厚さ 9cm の褐色土で砂や砂利を多く含む。③は、橙色の砂質土である。遺物包含層を挟まず、遺構も浅いため、大きく削平したうえに整地された可能性が高い。

遺構 (図 29) 地山面で、柱穴 3 基 (SP1～3) と、土坑 1 基 (SK1) を検出した。

SP1・2 は深さ 8cm 前後とごく浅い。SP3 は現状の深さ 28cm 前後で、SK1 よりも時期は新しい。また、SP3 の中には残存高約 20cm の柱材が残るが、同様の遺構を検出してないため、掘立柱建物に伴うものなのかは断定できない。SK1 は、現状の深さが 16cm 前後であり、東側壁面に表れた遺構断面と、幅・深さとともに類似する。したがって、ここでは土坑として扱ったが、実際には 2m 以上に延びる溝の可能性も排除できない。

遺物 今回の発掘調査では遺物は出土しなかった。

まとめ 今回の発掘調査では 4 基の遺構を検出したが、いずれも土器が出土しなかったため、時期は不明である。ただ、あくまでも状況からの推測だが、ほぼ同じ深さの SP1 と SP2 が同時期に位置づけられる可能性はある。また、次節で報告する KOR14 - 3 は今回の調査区の北側に位置し、両調査区ともに同様の掘削深度で遺構が検出されていることから、近しい時期における遺構の面的な広がりを想定できる。

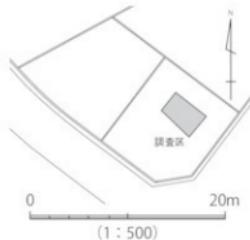


図 27 KOR14 - 1 位置図



図 28 郡遺跡周辺地図

KOR14 - 3 の SD2 からは瓦器が出土したため中世以降の埋没が想定されている。したがって、必ずしも積極的な根拠ではないが、今回の調査区の時期の一端も中世に含まれる可能性を考えてもよいだろう。

なお、今回の調査区は郡遺跡の包蔵地内に位置するが、平成 14 年（2002）に南方約 100m 地点で行われた郡山遺跡の発掘調査において、奈良時代前期の比較的大型の掘立柱建物が検出されている。このような建物の後ろ盾となった集団の活動範囲も相応の広がりをもっていたと想定できるため、今回の調査区周辺も郡遺跡の包蔵地内にとどまらず、郡山遺跡の周縁にあたることを念頭に置いておく必要があるだろう。

[齊藤]

参考文献

茨木市教育委員会 2003 『大阪府茨木市平成 14 年度発掘調査概報』

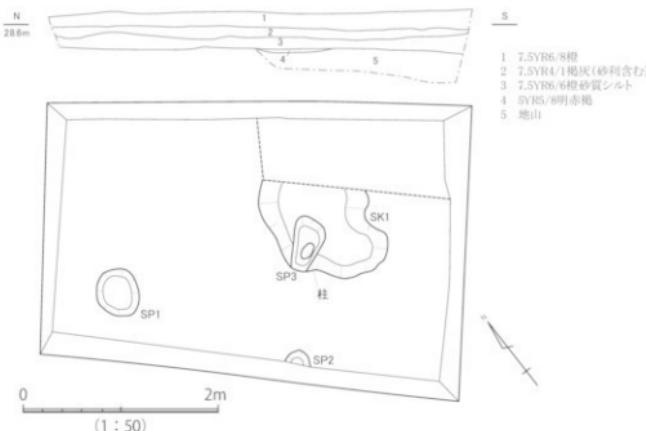


図 29 KOR14 - 1 遺構平面・断面図

8. 郡遺跡 [KOR14-3]

調査地 | 郡五丁目

調査期間 | 平成 26 年 5 月 13 日

調査担当 | 高村勇士

はじめに 郡五丁目で計画された個人住宅建築に伴い、平成 26 年 5 月 13 日に確認調査を実施したところ、遺構及び遺物を確認したため、南北 2m × 東西 2m の調査区を設定し、本発掘調査を行った。

基本層序 今次調査区の現地表面は、標高 T.P. + 28.7m を測る。層序は、①盛土、②整地土、③地山である。遺構は、3 層上面で検出した。第 3 層上面の標高は、およそ T.P. + 28.4m である。ただし、包含層がないことなどから、遺構面である 3 層上面は削平されていると考えられる。

遺構・遺物 (図 31) 今次調査区では、溝 2 条 (SD1・2)、ピット 3 基 (SP1～3)、不明遺構 (SX1) を検出した。

SD1 は調査区東側を南北に走る二段堀状の溝である。東肩は調査区外にあり、溝幅は不明であるが、検出面において幅約 75cm 以上、深さは 1 段目で約 8cm、2 段目で約 27cm を測る。埋土は上層と下層に分けることができ、上層は 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト、下層は 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂である。また、SD1 は SP1・SP2・SP3 に切られている。

SD2 も調査区西側を南北に走る溝である。検出面において、溝幅約 18cm、深さ 9cm を測る。埋土は 10YR5/3 に近い黄褐色細粒砂である。南壁断面の観察により、西側にある畦に伴う溝である可能性がある。また、SD2 は SX1 に切られている。

SP1・SP2・SP3 はいずれも、上部を大きく削平され検出面からごく浅く、遺構の最下部がわずかながら残存したものと考えられる。埋土は 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトで同様であり、一体の建物を構成する遺構であると考えられ、SP1・SP2 からは摩滅した土師器の細片が出土している。

SX1 は、調査区西部から調査区外に延びる遺構であり、詳細は不明なところが多い。その埋土は 10Y5/1 灰色細粒砂である。

SD1 から須恵器片、SD2 から瓦器や土師器の細片がわずかながら出土しているが、いずれも図化に堪えない。SD2 のみ瓦器が出土することから、中世以降に埋没したと推測するにとどまり、いずれの遺構も所属時期を決定し得ない。

まとめ 今次調査において、数基の遺構を検出したが、その所属時期等を判断するに足る資料は得られなかった。近隣の既往調査においても、ほぼ同一面上で遺構を確認しているが、その関連は判然としない。今次調査で確認した遺構・遺物が、周辺の調査を重ねることによって有機的に関連し明らかになるものと思われる。[高村]

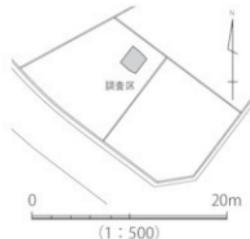


図 30 KOR14-3 位置図

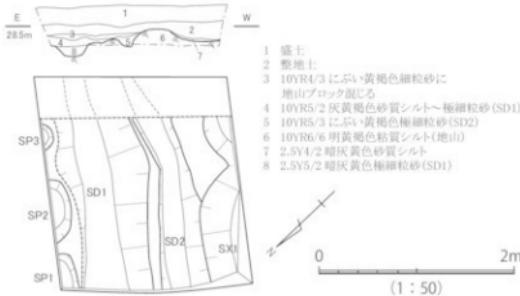


図 31 KOR14-3 遺構平面・断面図

9. 鮎川遺跡 [AYK14 - 1]

調査地 | 鮎川二丁目

調査期間 | 平成 26 年 6 月 10 日～12 日

調査担当 | 齋藤大輔、高村勇士

はじめに 鮎川二丁目に個人住宅建築の計画があり、当該地に 2m × 2m のトレンチを設定し、確認調査を行ったところ、下記第 6 層を掘削したところで、激しい湧水が起きたため、あらためて 2m × 2m のトレンチを設定し直し、調査を行った。[高村]

基本層序 (図 34) 調査地の現地表面の標高は、およそ T.P. + 6.8m である。層序は、①盛土、②耕作土、③整地土、④ 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト、⑤ N6/ 灰色粘質シルト（土器含む）、⑥ 2.5Y6/6 明黄褐色中粒砂混じり粘質シルト（土器含む）、⑦ N3/ 暗灰色砂質シルト（しまり弱く自然木片含む）、⑧ 爆混じり細粒砂である。湧水のため、地山層までは確認することができなかった。第 8 層上面の標高は、およそ T.P. + 5.0m である。[高村]

遺構 今次調査の範囲において、遺構は確認できなかった。ただし、第 5 層・第 6 層に古代の所産と考えられる土師器片・須恵器片が確認できた。第 5 層・第 6 層はいずれもあまり土壤化しておらず、プライマリーな包含層として考えがたいことから、出土した遺物はいずれも二次堆積と考えられる。したがって、第 5・6 層は古代以降に堆積したと考えるにとどまる。[高村]

遺物 (図 35) 出土した 2 点を図化した。1 は土師質の把手部分である。平面形は三角形状で薄く仕上げている。かろうじて残る器壁は薄く、内面には丁寧なナデを、把手と外面の接合部にはハケを施している。胎土は精良で、外面には煤が付着している。鍋であろう。2 は口縁部を欠くものの、平らな底部から斜め上方にひらく須恵器杯 A である。7 世紀後半から 8 世紀前半頃の所産であろう。[川村]

まとめ 今次調査は、面積狭小な上に、激しい湧水のため、得られた情報は限られたものであった。

鮎川遺跡の全容は、調査事例が少なく不明な点が多い。ただし、調査区の道路を挟んで東側における既往の調査 (AY09 - 1) では、弥生土器や古代の土師器などが出土しており、さらに自然河川の存在が指

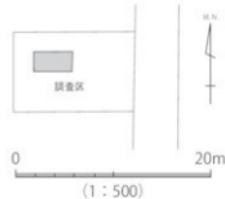


図 32 AYK14 - 1 位置図



図 33 鮎川遺跡周辺地図

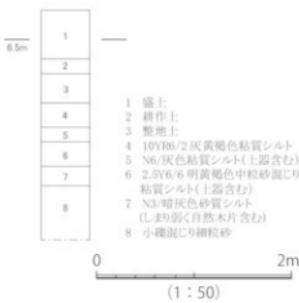


図 34 AYK14-1 柱状図

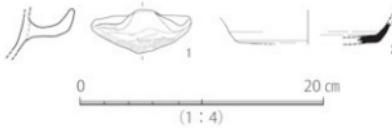


図 35 AYK14-1 出土実測図

摘されている。今次調査で得られた資料と直接関連するところは少ないが、今後、調査を積み重ねることによって次第に明らかになると思われる。[高村]

参考文献

茨木市教育委員会 2010『大阪府茨木市平成 21 年度発掘調査概報—個人住宅建築に伴う発掘調査報告—』

10. 東奈良遺跡 [HN14 - 1]

調査地 | 東奈良二丁目

調査期間 | 平成 26 年 4 月 10 日～11 日

調査担当 | 齋藤大輔、高村勇士

はじめに 東奈良二丁目で計画された個人住宅建築に先立ち確認調査を行ったところ、遺構や遺物を検出したため、本発掘調査を実施した。掘削範囲は 3m × 3m の 9 基である。

基本層序 地表面の標高はおよそ T.P. + 8.1m である。基本層序は、G.L. - 0.9mまで盛り土、G.L. - 1m～1.5mが旧耕土である。G.L. - 2.4m で、弥生土器片を多く含む黒色土の遺物包含層を検出した。

遺構(図 38) G.L. - 2.6m付近で、南北方向の溝(SD1)を 1 条検出した。SD1 の深さは現状で 25cm 前後、幅及び本来の深さは不明である。

遺物(図 39) 包含層及び SD1 からは多くの弥生土器片が出土した。図化したのは、そのうち口縁等の形態を比較的よく残すものである。

1・2 は機械掘削時の出土。1 は広口壺の口縁で、垂下口縁の端面に縦 3 列一単位の刺突文を回らす。2 は壺の口縁部で、内外にヨコナデを施す。3 は大型広口壺の口縁部。端部の垂下口縁は、粘土を貼りつけて成形する。4 は甕の口縁。5 は、壺の口縁端部を一度外側に張り出した後、内側にわずかに屈曲する。6 は、口縁の端部が上下に肥厚し、Y 字をなす。本体から作り出した口縁を下に屈曲させたのち、上に別づくりでつまみ出すようだ。時期は中期中葉か。7 は、甕の口縁で器壁は薄い。8 は、広口壺の口縁部。口縁は、指オサエとナデで調整し、頸部以下はタタキを施す。9 は甕で、口縁部と、体部の下半分を欠く。外面は平行タタキ、内面にはヨコハケを施す。10 は、外面に横方向のタタキを施す。底部には薄い高台状に粘土帶を張り付けている。11 は、壺の口縁。端部はつまみ出して上方に垂直に立つ。内外をヨコナデで調整する。12 は、壺の口縁か、器壁は薄く、内外をヨコナデで調整する。13 は、壺の口縁。口径は復元できないが、頸部から口縁にかけて短く外反する。内面から外部の上から 2cm 付近までヨコナデで調整するが、外面のそれ以下はタテハケを施す。14 は、平底壺の底部。15・16 は、鉢か。口縁の外

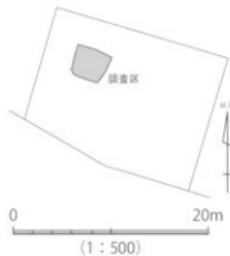


図 36 HN14 - 1 位置図



図 37 東奈良遺跡周辺地図

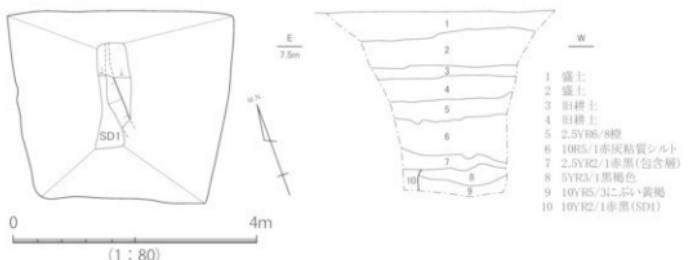


図 38 HN14-1 遺構平面・断面図

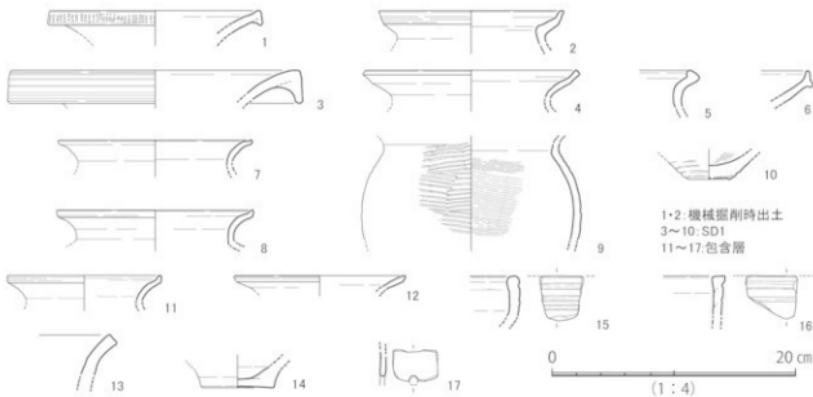


図 39 HN14-1 出土土器実測図

面に2ないし3条の沈線を施す。17は、他の土器に比べて器壁が薄く、円孔を穿つなど、器種は不明ながら特徴的な遺物として提示する。

まとめ 今回の調査では、南北方向の溝を1条検出した。遺構及び遺物包含層から出土した土器の特徴から、弥生時代中期後葉～後期を中心とする時期が考えられる。平成24年（2012）3月に、10m程北西の区画で行われた発掘調査でも、弥生時代後期を中心とする土器片が出土しているが、両調査区をつなぐ遺構は確認できなかった。しかしながら、両調査区ではほぼ同時期の土器が比較的豊富に出土したことと、東奈良遺跡を特徴づける銅鐸の石製錫型出土地のすぐ北に位置することをあわせ、銅鐸製作集団の基盤集落である可能性は念頭に置いておくべきだろう。[齊藤]

参考文献

茨木市教育委員会 2013『大阪府茨木市平成24年度発掘調査概報—個人住宅建築に伴う発掘調査報告—』

11. 中条小学校遺跡 [CJS14-1, CJS14-2]

東奈良遺跡 [HN14-3, HN14-4, HN14-5, HN14-7]

中条小学校・東奈良遺跡 [CJS・HN14-1]

調査地 | 新中条町

調査期間 | 平成 26 年 7 月 23 日～8 月 25 日

調査担当 | 木村健明、高村勇士

はじめに 新中条町で計画された個人住宅建築に伴い、平成 26 年 7 月 23 日～8 月 25 日の期間で、各調査地に南北 3m、東西 2m の調査区を設定し、本発掘調査を行った。

上記の発掘調査は、いずれも同じ造成地内における調査である。現在は中条小学校遺跡と東奈良遺跡にまたがって位置し、個別の「発掘届出」に基づく調査ではあるが、下記の基本層序も概ね共通することから、当該地は一体的に捉えるべきである。したがって、便利的に一連の調査としてまとめて報告する。[高村]

基本層序 現地表面の標高は、T.P. + 9.3m ~ 9.4m を測る。層序は、①盛土、②耕作土、③整地土 1、④整地土 2、⑤地山である。後述するように、第 4 層には、弥生土器、土師器、須恵器などが含まれていたが、プライマリーな包含層とは考え難い。また、調査区によって、土壤化した包含層が第 4 層と第 5 層の間に残存していたが、第 4 層堆積以前に地山面とともに削平されていると考えられる。遺構は第 5 層上面において検出した。第 5 層上面の標高は、およそ T.P. + 8.1m ~ 7.8m である。[高村]

CJS14-1 今次調査において検出した遺構は、ピット 4 基 (SP1 ~ 4)、土坑 1 基 (SK1) である (図 42)。いずれも上部を削平されていると考えられ、深度は浅い。SP1、SP3、SP4 の埋土は

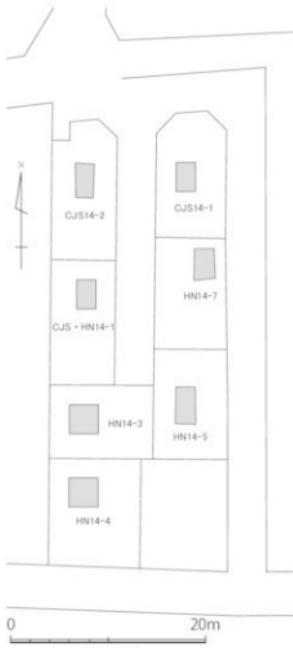


図 40 CJS・HN 位置図

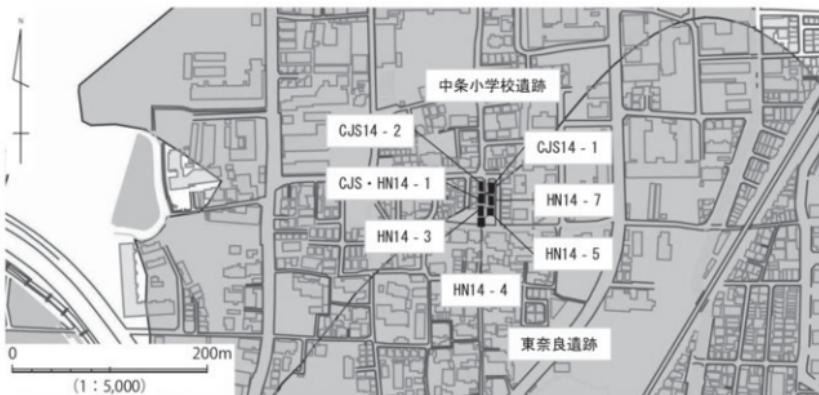


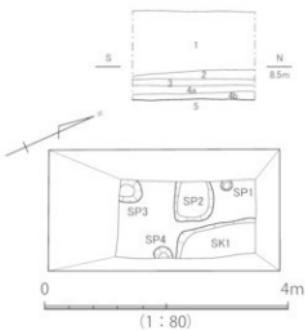
図 41 中条小学校遺跡・東奈良遺跡周辺地図

単一層で 10YR3/2 黒褐色粘質シルトであり、深さは約 3 ~ 5cm である。SP2, SK1 の埋土は、10YR3/2 黑褐色土と地山ブロックが混合しており、深度はごく浅い。遺構の底辺部のみが残っていたと考えられる。出土した遺物はいずれも小片で、図化に堪えるものは少ないが、わずかに時期を推測できるものが認められた。具体的には、SP2 から古代の範疇で捉えられる土師器の杯の小片が出土している（図 43）。また、その他の遺物も時期を特定することはできないが、古代と考えて矛盾するものはない。また、第 4 層から古代の所産と考えられる須恵器の杯蓋の小片も出土している。断定には堪えない出土状況・数量ではあるが、以上のことから、検出した遺構の時代を古代と推測する。[高村]

CJS14 - 2 今次調査においては、ビット 3 基 (SP1 ~ 3)、土坑 2 基 (SX1・2)、溝 1 条 (SD1) を検出した（図 44）。

SP1, SP2 の埋土は、10YR3/1 黒褐色粘質シルトで单一であるが、SP3 は南北に半裁したところ、黒褐色粘質シルトの左右に地山ブロックを含んだ埋め戻し土が認められた。いずれも深さ約 10cm 程度であり、上部を削平されていると考えられる。SX1 は一辺 80cm 以上、SK2 は南北 50cm 以上、東西 80cm 以上を測り、いずれも方形と考えられるが、調査区外に延びており、全体の規模は不明である。埋土は SX1・2 とも黒褐色粘質シルトに明黄褐色粘質シルトブロックが混在していた。その深さはいずれも約 10cm であり、上部が削平され遺構の底辺部が残存したと考えられる。竪穴建物の貼り床として機能したものとも考えられるが、その全体の規模など不明な点も多く、断定は躊躇する。竪穴建物の可能性を指摘するにとどめたい。SD1 は、幅 25cm を測り、調査区を南東から北西に走る。埋土は、N5/ 灰色砂質シルトで单一であり、他の遺構とは明らかに異なる。また、SD1 は、SX1 と SX2 を切っている。これらのことから、SD1 は、他の遺構が埋没した後に機能したと考えられる。ただし、SP1 との関係は判然としなかった。SD1 が途切れる、もしくは深度を上げるなどにより、SP1 部分では検出できなかったと推測したい。第 3 層、第 4 層からわずかに土師器・須恵器が出土しているが、いずれも小片で図化には堪えない。[高村]

CJS - HN14 - 1 今次調査において、遺構は検出されなかった。ただし、調査区南側 3 分の 1 に地山面の落ち込みが確認できた。西壁断面で確認すると、第 4 層が T.P. + 8.15m から T.P. + 8.00m まで南東に向かって約 15cm の落ちが確認できる。落ち込み内の土は、第 4 層とほぼ同様でわずかにベース土が混じるのみで、積極的に遺構とは評価しがたい。また、南に位置する HN14 - 3 の地山面は T.P. + 7.9m、南東に位置する HN14 - 5 の地山面は T.P. + 7.95m を測ることから、地山面が削平を受けていることを考慮しても、地山面が南東に向かっ



1 盛土
2 繊土…5GY2/1オーブ黑色砂質シルト1cmの纏わざかに含む
3 整地土…5G6/1緑灰色砂質シルト性および
全体的に弱く酸化し、一部帯状
4a 整地土 2 上器含む…2.5Y6/3黄褐色粘質シルト
4b 整地土 2 上器含む…10YR4/2灰黃褐色粘質シルト
地山…2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト(しまり強)

図 42 CJS14 - 1 遺構平面・断面図

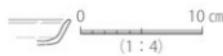


図 43 CJS14 - 1 出土土器実測図

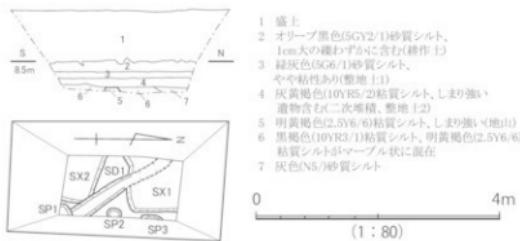


図 44 CJS14 - 2 遺構平面・断面図

てゆるやかに傾斜していたと推測でき、このことは今次調査区の北西における既往の調査結果とも合致する。遺物は、第3層・第4層から土師器・須恵器がわずかに出土しているが、いずれも小片であり図化に堪えうるものはない。[高村]

HN14 - 3 今次調査において遺構・遺物は検出できなかった。しかしながら、上記の基本層序を確認し、本報告中の調査区と同領域として捉えることができる。また、東西断面には、南に向かって2層直下から5層までを切る層が確認でき、南部は耕作段階に破壊を受けていることが確認できた。この状況は、本調査区の東に位置するHN14 - 5でも確認でき、HN14 - 3とHN14 - 5を東西に結ぶライン以南は、耕作段階において遺構面の破壊を受けていると推定できる。[高村]

HN14 - 4 今次調査において遺構・遺物は確認できなかった。さらに、第1層の盛土段階による5層までの搅乱を確認した。[高村]

HN14 - 5 今次調査において、確認できた遺構は若干の残る包含層上面から切り込んでおり、多少の掘り過ぎもあって平面的には確認することができなかつたが、西壁断面において土坑(SK1)1基が確認できた。その直上の第4層が整地土であることから、上部を削平された可能性があるが、確認できた範囲で、長さ約1m、深さ20cmを測る。SK1の埋土には全体的に地山ブロックが混入しており、埋め戻し土と考えられるが、遺物や柱痕等は確認できず、時期や性格の詳細は不明と言わざるを得ない。[高村]

HN14 - 7 今次調査において遺構は、土坑1基(SK1)、ピット1基(SP1)を検出した(図45)。いずれも一部の検出にとどまっており、遺物も出土しなかつたため、時期は不明である。SK1は調査区の南端で検出した。南北40cm以上、東西90cm以上、深さ18cmを測る。埋土は黄灰色粗砂混じり粘質土である。溝になる可能性も考えられる。SP1は調査区の北東隅で検出した。南北34cm以上、東西20cm以上、深さ8cmを測る。埋土は淡黄色粘土である。第4層から弥生土器、土師器、須恵器が数点出土した。図化できたのは、弥生土器底部のみである(図46)。底径8.6cm、残存高2.8cmを測る平底の底部で、外面にナデを施す。内面は摩滅のため調整不明である。[木村]

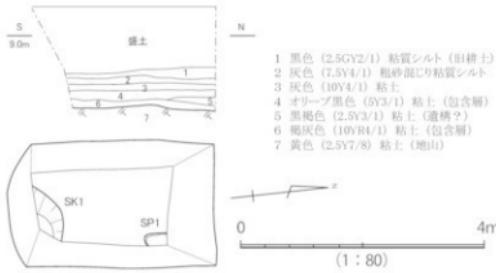


図45 HN14-7遺構平面・断面図

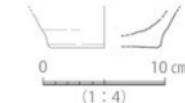


図46 HN14-7出土土器実測図

まとめ 今回の一連の調査において、各調査区はいずれも狭小な範囲での発掘調査であり、不明な部分を多く残してしまった。しかし、互いに関連させることによって、考えうることをまとめておきたい。

今回の一連の調査区は、いずれも基本層序をおおむね共通させており、埋蔵文化財包蔵地名が異なるものもあるが、一体として把握できる。この前提に立つき、遺構面である地山面はおおむね北西から南東に傾斜していることが分かり、このことは、今次調査区の北西で実施された既往の調査結果とも一致する。また、遺構の時期について考えられる材料は少ないが、CJS14 - 1において、おおむね古代に属すると考えられる資料が得られた。今次調査地には、少なくとも古代の遺構面が存在していたと考えられる。

なお、不明な部分は多くあるが、今後の調査の進展により、今回の調査で得られた成果が有機的に関連し、明らかになっていくものと思われる。[高村]

12. 安威古墳群 [AIK14 - 1]

調査地 | 安威三丁目

調査期間 | 平成 26 年 11 月 26 日～27 日

調査担当 | 藤田徹也

はじめに 個人住宅建築に際し、確認調査を行った所、地表面から約 -0.6m のところで瓦等の遺物が出土し、包含層と考えられるため、3m × 5m の調査区を設定し本発掘調査を行った。

基本層序 ①盛土、②2.5Y5/3 黄褐色（砂質シルト）、③2.5Y3/1 黒褐色（粘質シルト～極細粒砂）となる。③は、瓦器や瓦などが出土した包含層であり、後述する SD1 は③層上面で検出した。

遺構（図 49）・**遺物** SD1 は、南東角で検出した。遺構の大部分が調査区外へと延びるため、全容は不明である。平面プランでは、大規模な土坑に見て取れるが、調査区南壁の断面で遺構の最下層が確認できるものの、南壁東側で上がるなど深さが一定しない状況が認められるため、溝のコーナー部分に該当するものと判断した。なお、SD1 を完掘すると工事掘削深度を大きく超えるため、平面プランの確認と調査区南壁際のサブトレンチで掘削を留めた。

出土遺物として、瓦が挙げられる。今次調査区から出土した瓦の中に一部布目の痕跡を持つものも認められるが、SD1 から出土した瓦には布目は認められなかった。

SD2 は、南東方向軸から南北方向軸へと曲がる L 字状の溝である。東側は SD1 に切られ、南北方向軸は、南側調査区外へと延びるため、全容は不明であるが、L 字状に曲がる特徴を踏まえると建物等の区画溝であると考えられる。出土遺物としては、備前焼のすり鉢、瓦等が出土したが、実測するに至らなかった。最終埋没期は 15 ~ 16 世紀代と考えられる。

SD3 は、SD1・SD2 に切られ、わずかに調査区中央南に肩部が残る。埋土には拳大の礫が多数認められ、地山ブロック等も一部に見られたことから、人為的な埋め戻しの可能性が高い。出土遺物として、瓦・瓦

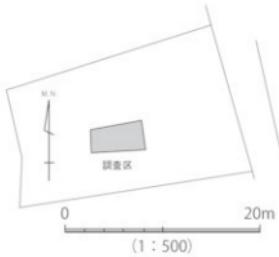


図 47 AIK14-1 位置図



図 48 安威古墳群周辺地図

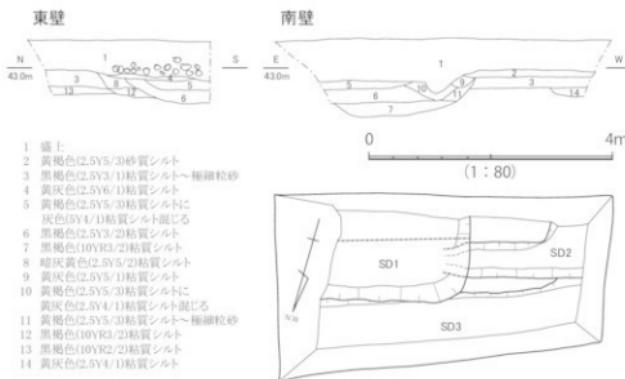


図 49 AIK14-1 遺構平面・断面図

器梶の碎片等が挙げられる。瓦器梶の焼成状態等から瓦器梶の終焉に近い時期、つまり 14 世紀前半頃の所産とも考えられるが、詳細は不明である。なお、SD3 から出土した瓦の一部に布目の痕跡が残る資料も認められる。

まとめ 今次調査区では切りあう 3 条の溝を検出した。各遺構の全容は不明ながらも、溝の主軸は、ほぼ同様の軸であると考えられる。今次調査区東側を通る道路は、安威の旧集落から調査区北方に位置する大念寺に通じる道であり、検出した溝はこの道路と平行もしくは直行する軸となっている。各時期の溝の主軸と現状の道路軸が有機的な関係にあるものとすれば、時代や社会的変化に左右されることなく道路及び区画軸は今まで引き継がれているものと想定できる。

さて、現在の大念寺は、天正年間（1573～1592）に専修上人が大山崎の大念寺から入って浄土宗の道場としたとされ、今次調査区の成果からみれば SD2 の L 字状区画溝の時期に該当する。今次調査区が大念寺とどのような関連性を持つのかは推測の域をでないが、先述した主軸を踏まえれば、中世段階の安威を総括して捉えていくには有効な資料であろう。

今次調査区南側と安威の旧集落を包括する埋蔵文化財包蔵地「安威城跡」の間には一定空間包蔵地外の区域が存在し、安威の集落から大念寺までの道路及び集落は包蔵地には含まれてはいない。今後は、当該地南側の安威旧集落に位置する埋蔵文化財包蔵地「安威城跡」の成果や周辺の調査事例、また当該地と大念寺を含む埋蔵文化財包蔵地「安威古墳群」の中世をセットで捉えていくことで、当該地周辺の様相がより明らかになっていくであろう。〔藤田〕

図版一 車礼遺跡



MUR13-10区 南壁



MUR13-10区 各遺構出土土器

図版二
牟礼遺跡



MUR14-3区
1区東壁断面（西から）

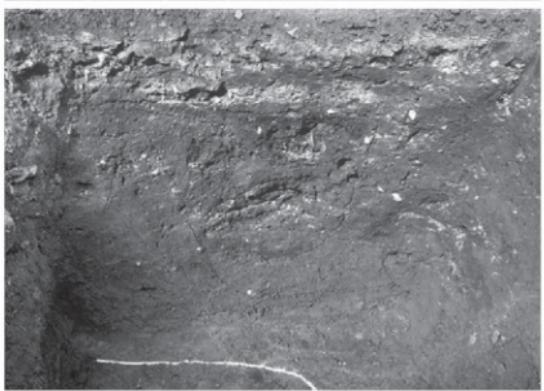


MUR14-3区
2区東壁断面（西から）



MUR14-3区
包含層出土土器

図版三 茨木遺跡



図版四
茨木遺跡



IBK13-7 区
2区第1面全景（西から）

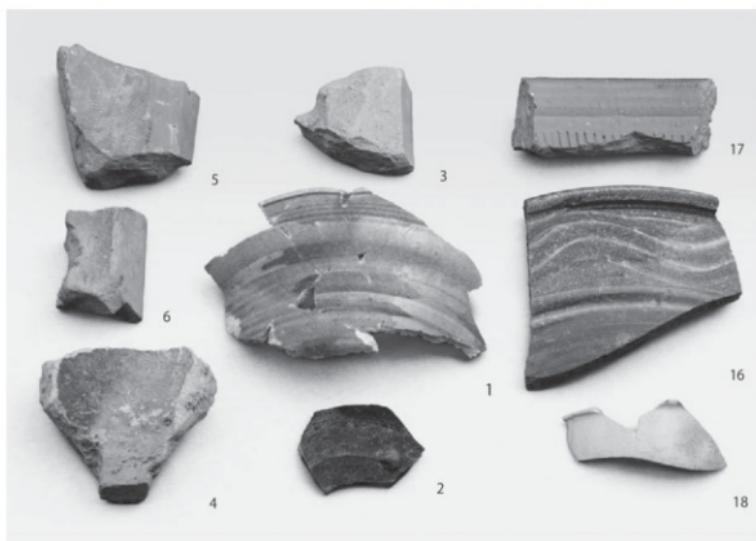


IBK13-7 区
2区第2面全景（西から）



IBK13-7 区
2区北壁

図版五 茨木遺跡



IBK13-7区 1区 SK1・2・6、SD5、2区出土遺物



IBK13-7区 1区出土遺物

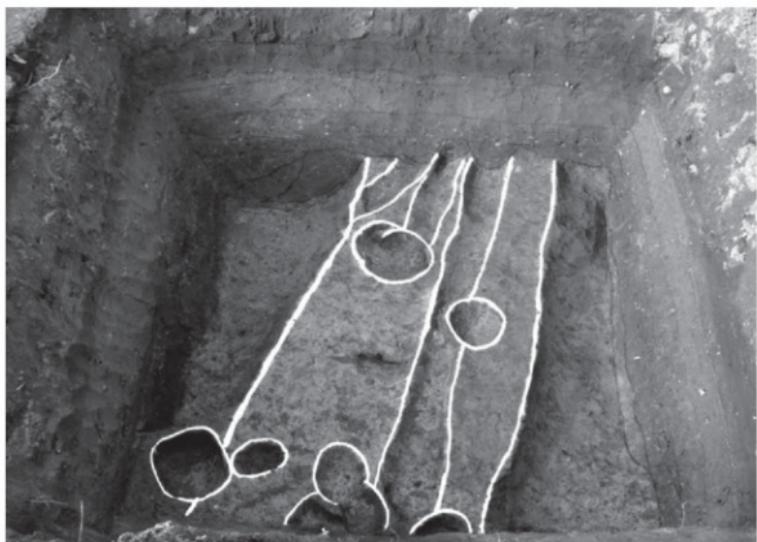
図版六
茨木遺跡



IBK14-5区 トレンチ全景（北東から）



IBK14-5区 各遺構出土土器



HKA13-3区 トレンチ全景（南から）



HKA13-3区 SD1、包含層出土遺物

図版八
倍賀遺跡



HKA13-3区 SP1 出土須恵器



HKA13-3区 SD4 出土須恵器



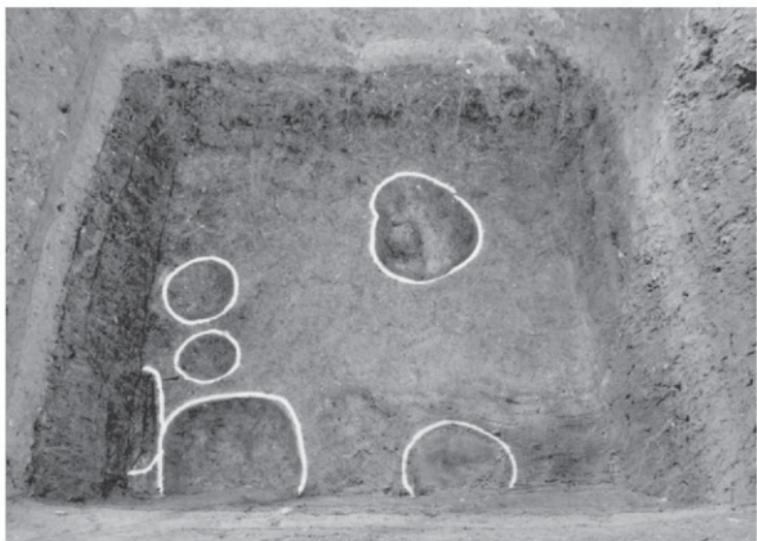
HKA13-3区 SP1 出土須恵器



HKA13-3区 SD1 出土須恵器



HKA13-3区 SD1・3、包含層出土須恵器



HKA14-1 区 トレンチ全景（東から）

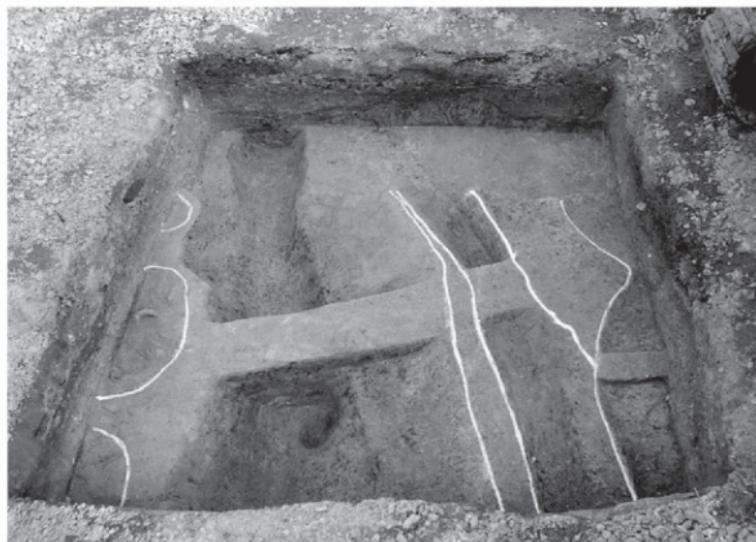


HKA14-1 区 各遺構出土土器

図版十
郡遺跡



KOR14-1 区 トレンチ全景（北から）



KOR14-3 区 トレンチ全景（北から）

図版十一 鮎川遺跡



AYK14-1区
調査区近景（東から）



AYK14-1区
北壁断面

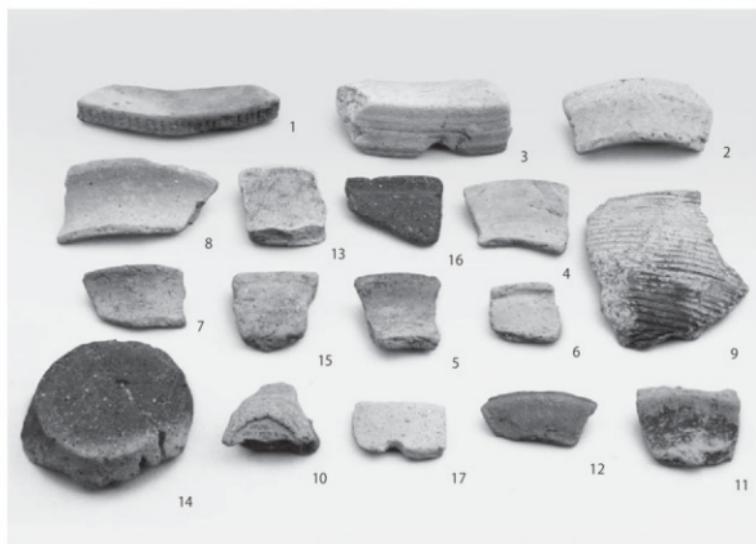


AYK14-1区
出土土器

図版十二 東奈良遺跡



HN14-1 区 北壁

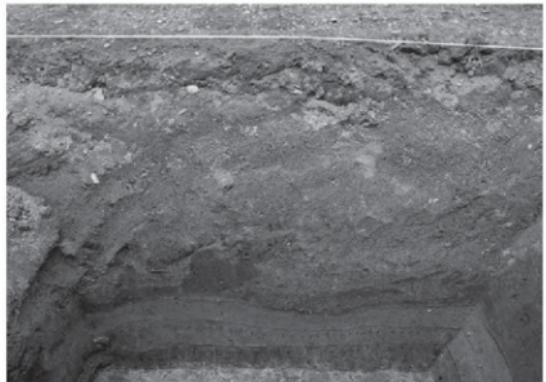


HN14-1 区 各遺構出土土器

図版十三 中条小学校・東奈良遺跡



CJS14-1 区
トレンチ全景（北から）



CJS14-1 区
西壁



HN14-7 区
トレンチ全景（北から）

図版十四 中条小学校遺跡



CJS14-2区 トレンチ全景（北から）



CJS14-2区 西壁

図版十五 安威古墳群



AIK14-1区 トレンチ全景（西から）



AIK14-1区 SD1（西から）

報告書抄録

ふりがな	～いせいじじゅうろくじゆくじゆくじめいじゅうぶんかせいはつてつちようきがいほりなーこっこほじょじぎょうにともなうはつてつちようきー
書名	平成26年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報7—国庫補助事業に伴う発掘調査—
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第60集
編著者	川村和子、木村健明、齊藤大輔、高村勇士、富田卓見、藤田徹也
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号
発行年月日	平成27年(2015)3月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平乳遺跡〔MUR13-10〕	中津町	34° 81' 69"	135° 58' 18"	H26. 1. 6	5 m ²	
平乳遺跡〔MUR14-3〕	園田町	34° 81' 33"	135° 58' 24"	H26. 9. 18	12.25 m ²	
茨木遺跡〔IBK13-7〕	宮元町	34° 81' 99"	135° 57' 37"	H26. 3. 12	6 m ²	
茨木遺跡〔IBK14-5〕	大手町	34° 81' 56"	135° 57' 20"	～H26. 7. 23	10.2 m ²	
信賀遺跡〔HKA13-3〕	春日四丁目	34° 82' 24"	135° 56' 61"	H26. 3. 17	9 m ²	
信賀遺跡〔HKA14-1〕	春日四丁目	34° 82' 36"	135° 56' 55"	H26. 10. 6	9 m ²	
郡遺跡〔KOR14-1〕	郡五丁目	34° 83' 36"	135° 55' 39"	H26. 4. 7	12 m ²	
郡遺跡〔KOR14-3〕	郡五丁目	34° 83' 36"	135° 55' 39"	H26. 5. 13	4 m ²	
帖川遺跡〔AYK14-1〕	帖川二丁目	34° 82' 13"	135° 59' 28"	～H26. 6. 10	8 m ²	
東奈良遺跡〔HN14-1〕	東奈良二丁目	34° 80' 21"	135° 56' 98"	～H26. 4. 10	9 m ²	個人住宅建設工事
中条小学校遺跡〔CJS14-1〕	新中条町	34° 80' 44"	135° 56' 63"	H26. 7. 24	6 m ²	
中条小学校遺跡〔CJS14-2〕	新中条町	34° 80' 84"	135° 56' 62"	H26. 7. 25	6 m ²	
東奈良遺跡〔HN14-3〕	新中条町	34° 80' 81"	135° 56' 62"	H26. 7. 23	6 m ²	
東奈良遺跡〔HN14-4〕	新中条町	34° 80' 80"	135° 56' 62"	H26. 7. 24	4 m ²	
東奈良遺跡〔HN14-5〕	新中条町	34° 80' 81"	135° 56' 63"	H26. 7. 28	6 m ²	
東奈良遺跡〔HN14-7〕	新中条町	34° 80' 82"	135° 56' 63"	H26. 8. 25	6 m ²	
中条小学校・東奈良遺跡〔CJS-HN14-1〕	新中条町	34° 80' 83"	135° 56' 62"	H26. 7. 29	6 m ²	
安威古墳群〔AIK14-1〕	安威三丁目	34° 85' 32"	135° 56' 47"	～H26. 11. 26	15 m ²	

所収遺跡	種別	主な時代	遺構	遺物	特記
平乳遺跡〔MUR13-10〕	集落跡	縄文晩期	—	土師器、瓦器	
平乳遺跡〔MUR14-3〕	集落跡	縄文晩期	—	土師器	
茨木遺跡〔IBK13-7〕	集落跡	古墳	土坑	陶器、瓦等	
茨木遺跡〔IBK14-5〕	集落跡	古墳	柱穴、溝等	土師器	
信賀遺跡〔HKA13-3〕	社寺跡	古墳	柱穴、溝	須恵器、土師器等	
信賀遺跡〔HKA14-1〕	社寺跡	古墳	柱穴	須恵器、土師器	
郡遺跡〔KOR14-1〕	集落跡	弥生・古墳	柱穴、土坑	—	
郡遺跡〔KOR14-3〕	集落跡	弥生・古墳	柱穴、溝等	須恵器、土師器等	
帖川遺跡〔AYK14-1〕	集落跡	弥生・古墳	柱穴、溝等	須恵器、土師器	
東奈良遺跡〔HN14-1〕	集落跡	弥生・古墳	溝	弥生土器等	
中条小学校遺跡〔CJS14-1〕	集落跡	弥生・古墳	柱穴、土坑	須恵器、土師器	
中条小学校遺跡〔CJS14-2〕	集落跡	弥生・古墳	柱穴、土坑、溝	須恵器、土師器	
東奈良遺跡〔HN14-3〕	集落跡	弥生・古墳	—	—	
東奈良遺跡〔HN14-4〕	集落跡	弥生・古墳	—	—	
東奈良遺跡〔HN14-5〕	集落跡	弥生・古墳	土坑	—	
東奈良遺跡〔HN14-7〕	集落跡	弥生・古墳	柱穴、土坑	弥生土器、須恵器、土師器	
中条小学校遺跡・東奈良遺跡〔CJS-HN14-1〕	集落跡	弥生・古墳	—	須恵器、土師器	
安威古墳群〔AIK14-1〕	古墳	古墳	溝	瓦、瓦器柄、備前焼すり鉢	

平成 26 年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 7
—国庫補助事業に伴う発掘調査—

発行日 平成 27 年 3 月 31 日

発 行 茨木市教育委員会

印刷所 株式会社トウユー

